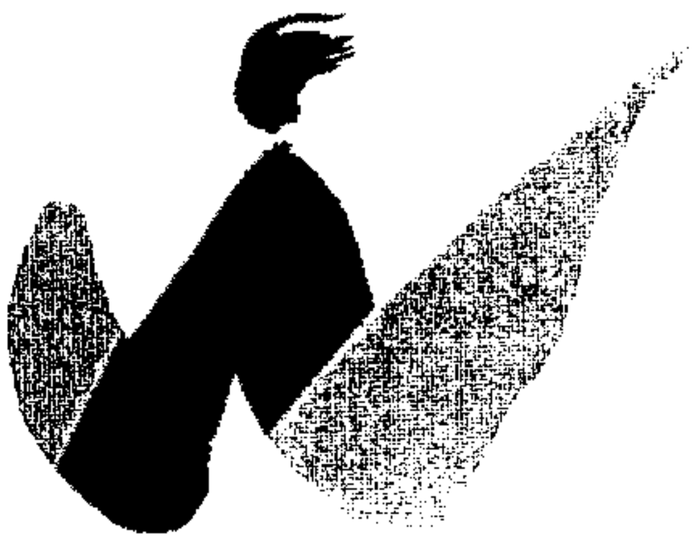
女性局一般資料No. 1

第49回「婦人週間」全国会議録

「女性週間」（21世紀の女性の地位向上）のシンボルマーク

労働省女性局



「女性週間」（21世紀の女性の地位向上）のシンボルマーク

ウーマン（Woman）の「W」をモチーフに女性の姿とオーバーラップさせて優しさ、温かさ、素晴らしさを表現した。
上部に伸びるシャープなラインは女性の地位向上を力強くアピールする。
左のブルーは海と空（冷静な判断力）、右の緑は大地（継続する力、歴史）、中央の赤はエネルギーを表す。

安部政秀　45歳　デザイナー　熊本県

はじめに

我が国の女性が初めて参政権を行使したのは昭和21年４月10日でした。労働省ではこれを記念して、昭和24年以来、４月10日に始まる１週間を「婦人週間」と定め、女性の地位向上のための啓発活動を全国的に展開しています。

この間、女性の地位向上のための法律や制度は整備され、女性も様々な分野に進出するようになりました。また、平成９年６月には、働く女性が性により差別されることなく、その能力を十分に発揮できる雇用環境を整備することを目指し、男女雇用機会均等法が改正されました。しかしながら、人々の意識の中には、依然として男女の能力や役割に対する固定的な考え方が根強く残っており、これらは真の男女平等を実現するうえで大きな課題となっています。

こうした考え方をなくすためには、個々人が個性をいかした自分らしい生き方を実現できる社会を創ることが大切であり、そのためには、男女双方が理解し、協力し合い、共に自分らしい生き方を実現できる社会を築いていくことが必要であることから、第49回を迎えた平成９年度は、昨年度に引き続き、「21世紀に向けて　自分らしい生き方ができる社会を創ろう」をテーマに活動を展開し、その一環として第49回「婦人週間」全国会議を開催し、約700人の参加を得ました。

ここに会議の記録をまとめ、関心のある方々の参考に供しますので、御活用いただければ幸いです。

最後に、多大な御協力をいただきました講師の先生方に深く感謝の意を表します。

平成９年10月

労働省女性局

目　次

Ⅰ　第49回「婦人週間」全国会議の概要 …… 1

Ⅱ　開会あいさつ …… 3

Ⅲ　祝　　辞 …… 5

Ⅳ　講　　演 …… 7

Ⅴ　シンポジウム …… 22

Ⅵ　閉会あいさつ …… 49

Ⅰ　第49回「婦人週間」全国会議の概要

1　趣　　旨　　近年、女性の地位向上のための法律や制度が整備され女性の社会進出が進み、実態面での男女平等もかなり達成されてきた。しかし、依然として男女の能力や役割に対する固定的な考え方が根強く、真の男女平等を実現するためには、このような固定的な考え方を払拭するための男女双方の努力が必要である。

このため、個人あるいは団体等が一層の女性の地位向上を図るための諸活動の情報や成果を交換し、今後の活動に資することを目的として、第49回「婦人週間」全国会議を開催する。

2　主　　催　　労　働　省

3　協　　賛　　財団法人　婦人少年協会

4　後　　援　　財団法人　日本国際連合協会
日本放送協会
社団法人　日本新聞協会
社団法人　日本民間放送連盟

5　テ　ー　マ　　21世紀に向けて　自分らしい生き方ができる社会を創ろう

6　開催期日　　平成9年4月21日（月）　13：00～16：00

7　開催場所　　イイノホール（東京）

8　参　加　者　　女性団体、青年団体、労働団体、経営者団体、社会福祉団体、職能団体、報道機関、関係官公庁、地方公共団体、その他の団体及び個人

9　プログラム

開　　会

開会あいさつ	労働大臣	岡　野　　裕
祝　　辞	国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会世話人	中　村　道　子

講　　演

「君についていこう」

慶應義塾大学助教授　　向　井　万起男

シンポジウム

「二人の生き方、考え方」

コーディネーター	女優・キャスター	石　井　苗　子
パネリスト	慶應義塾大学助教授	向　井　万起男
	ファッションデザイナー	花　井　幸　子
	㈱花井代表取締役	花　井　喜　俊

閉　　会

閉会あいさつ	労働省女性局長	太　田　芳　枝

Ⅱ　開会あいさつ

労働大臣　岡　野　　裕

司会からご紹介をいただきました労働大臣の岡野裕でございます。今日は大勢の皆さんに各地からおこしいただき、この「婦人週間」全国会議を盛り上げていただきますことを主催者といたしまして、お礼申し上げます。

実は楽屋裏で、中村先生、向井先生、花井ご夫妻の皆様でこれから婦人週間をどうするか、来年は数えて50回に成るが、どんな趣向を凝らしたらよかろうか等々のお打合わせをなさっておられたようでございますが、第49回の全国会議について１週間前新聞記者会見をやりまして、この週間は意義があると。昭和21年の４月10日に婦人がはじめて参政権を行使しました。それから遅れること３年、昭和24年を第１回として、この婦人週間行事を催してまいり、本年数えて49回目だと。催しとしては、向井先生、花井ご夫妻をパネリストにお迎えして講演、シンポジウムを予定している。このような話を新聞記者諸君にいたしました。そしたら記者クラブの記者から叱られました。

「まだ『婦人週間』なのか。もう『婦人』という言葉はやめて『女性』に変える、と何遍も記者クラブでも話をしたが、『婦人週間』では話が違うのではないか」と厳しい質問がありました。たまたま、婦人局長の太田君がおりましたので、「太田君、何で婦人週間だ。女性局長じゃないのか。あなたがまだ婦人局長というのはおかしいではないか」と言いましたところ、「この度『男女雇用機会均等法』が審議されることになっております。その条文の中で、『婦人局長』は以後『女性局長』というふうに改めることになっております」という返事がきましたので、「それでは、『婦人週間』はどうなるのか」と聞きました。そうしたら、「今年が49回目であります。50回というのは一つの節目でありましょう。そこで『婦人週間』を続けるのか、『女性週間』になるのか、あるいは『女性週間』になるとすれば、どういう行事を行うのか、これから検討することになっております」と。「それならば、今回は『第49回婦人週間』として行い、私は全国からお集まりの1,000人近い皆さんに中身の話をしよう。来年はよろしく頼むぞ。そのとき労働大臣が変わっても、今日のこの言葉はちゃんと伝えておくからな」と申した次第であります。

幸いにして今日は、慶應大学の先生をなさっておられます向井万起男先生におこしをいただき、そうして花井ご夫妻にお話をいただいて、男女それぞれが非常に複雑多様なお仕事をしながら職場においても、家庭生活においても、人間として生きがいのある人生を歩んでおられる秘けつ等のお話を皆さんに聞いていただきまして、加えてまたいっぱいご質問等もい

ただきまして、今日のこの意義ある「婦人週間」の趣旨を日常の生活の中に一つずつ実践、具現化させていただきますようお願いをいたしまして、労働大臣としての挨拶にさせていただきます。ありがとうございます。

Ⅲ 祝　辞

国際婦人年日本大会の決議を
実現するための連絡会世話人　中　村　道　子

皆様こんにちは。1949年以来、女性の地位向上のために毎年「婦人週間」の行事を続け、本日第49回の「婦人週間」全国会議を迎えることができましたことは、労働省が女性の意識高揚に大いなる貢献をしている成果の一つであります。国際婦人年連絡会を代表しまして心からお祝い申し上げます。

「自分らしい生き方ができる社会を創ろう」とは誰でも思うことでありましょう。ことに1995年の「北京世界女性会議」以来私どもだけではなく、世界のいたる所でも女性達は熱い思いでそのような社会を願って運動しています。どのようにして自分らしい生き方ができる社会を創ることができるのでしょうか。ただじっと待って我慢しているだけでは、天からそういう社会は降ってまいりません。いろんな条件が整わなければなりません。私ども国際婦人年連絡会はその条件の一つでも多くを満たすために、労働に関して行っている運動を２点だけ取り上げたいと思います。

１つはセクハラ、性的いやがらせの問題です。社会のいろんな場で性的いやがらせが行われています。電車の中で身体を触られたり、道を歩いて襲われたり、また職場でいやな思いを強いられることがあります。そういういやらしい社会では、女性は自分らしく生きようと思っても無理です。北京の行動綱領ではセクハラは女性に対する暴力として扱われています。国際婦人年連絡会は女性が生き生きと職場で働けるように、かねて職場におけるセクハラをなんとかしてなくしたいと思い、運動してきました。「雇用機会均等法」改正が取り上げられるようになったときに、セクハラに対する対応を要請しました。そこへ昨年の６月、ＮＯＷ（全米女性機構）からの要請があり、当時新聞紙上をにぎわせていた、米国における三菱自動車製造のセクハラ問題で、デンプシー副会長が日本を訪問したいということでした。国際婦人年連絡会ではデンプシーさんを受け入れることにしまして、数日間報道関係、女性団体、労働大臣、男女共同参画室、女性国会議員と三菱本社の重役との会合を持ち、米国での事情を聞き、その対処をデンプシー副会長と共に要請しました。そのときの大臣は、今日の大臣ではなかったんですけれど、ちゃんと受け入れられて、改正の「雇用機会均等法」の中に取り入れられております。これこそ国境を越えたパートナーシップといえましょう。

もう一つは、職場における女性労働者に対する差別をなくすことを要請しています。女性が男性とまったく平等な機会を与えられて働くためには、いままで保護規定で与えられてい

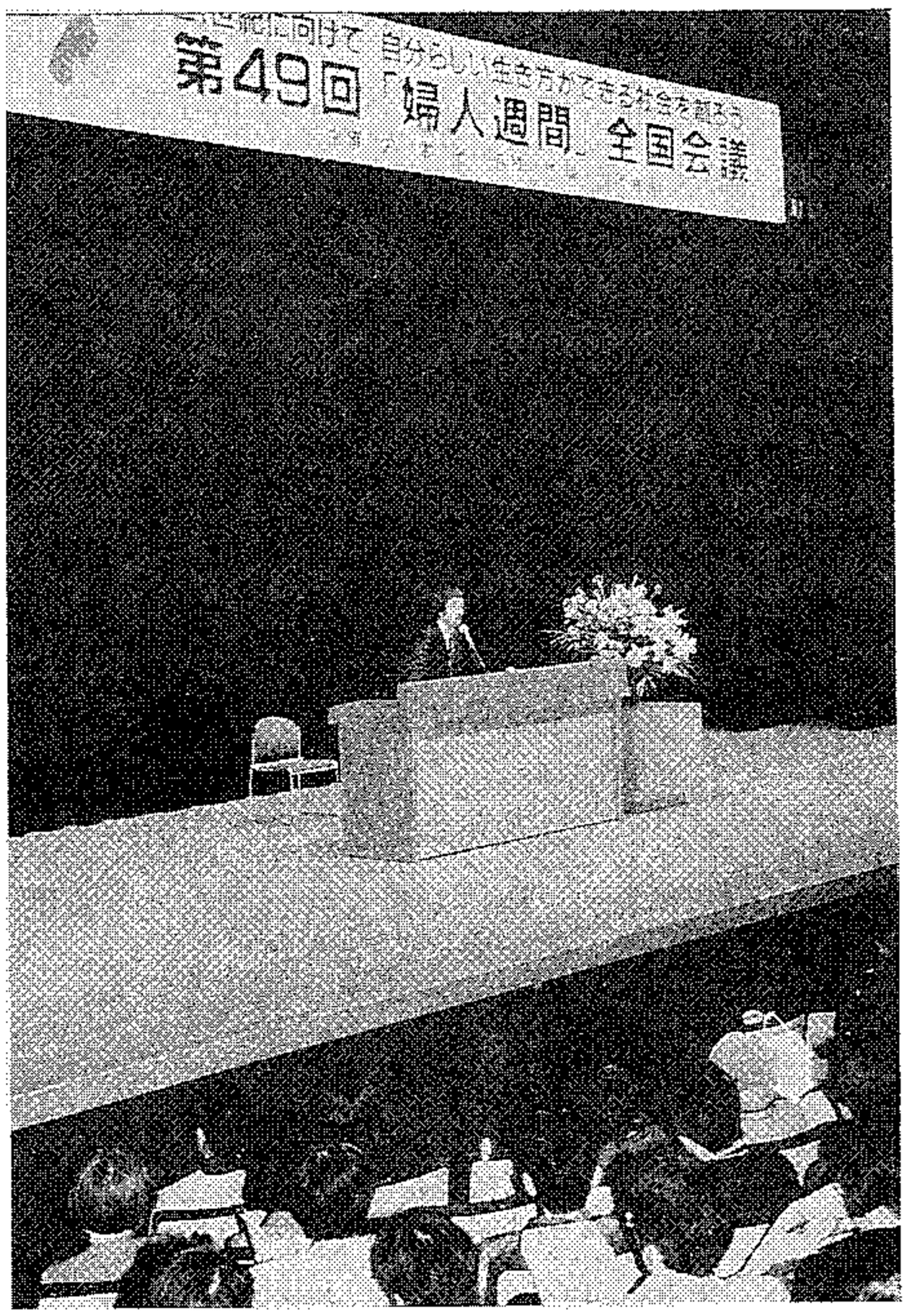
た特権をある程度犠牲にしなければなりません。つまり深夜業の規制の廃止がその一つであります。もちろん母性は守らねばなりません。そしてそのためには深夜業の制限が規定されています。この深夜業の規制廃止に対して、いま大変な反対運動が起こっています。先日も4,000人の抗議集会がありました。私たち女性は平等を望んでいるのでしょうか。保護を望んでいるのでしょうか。私どもは将来、もっと多くの女性が男性と平等な立場で働くことを願っています。そしてその労働条件が男性と平等になるためには、男性の労働条件もよくしなければなりません。男女が共に生き生き働けることを願っています。

平等ということは理想的ですが、それを勝ちとるための苦労には言い難いところがあります。権利を主張すれば、それに対する義務を忘れてはなりません。そしてそれに見合う能力もなければなりません。自分らしい生き方ということはどういうことでしょうか。決して自分勝手とか自分のしたい放題ということではなく、自分の個性を十分に生かすことのできる社会を意味していると思います。それぞれの個性はみんな違いますが、その多様な人間や人種を受け入れられる社会をつくりたいものです。なかなか大変なことですが、みんなで力を合わせれば実現できるのではないでしょうか。この「個性」というパスワードを大切にしながら、皆様と共に21世紀に向かっていきたいと思います。皆で協力いたしましょう。

Ⅳ　講　　演

君についていこう

慶應義塾大学助教授　向　井　万起男



皆さんこんにちは。私、慶應義塾大学で働いている医師で、今日はウイークデーなので、本当は仕事をしていなければいけないのですが、こんな時間にこんな所にいていいのかしらと思っています。今日のお話のお誘いを受けたときに、私は別に向井千秋の亭主だけで生きているわけではないのだから、ウイークデーはそんなことはしておられませんとお断りしたのですが、受けてしまった最大の理由は、いまから10年ほど前に労働省が作ったポスターに、私の女房が写真入りで載っていて、「いま個性が性を超える」という、私が大変気に入っているコピーが書かれています。私は、そのポスターをうちに大事に飾ってあるのです。ずっと一生持っていようと思って。そういうポスターを作ってくれた所の人がわざわざ来てくださったので、それではまあ仕事をサボッて来てしまおうかなと思って。その代わりに私は昨日の日曜日にはちゃんと誰もいない慶應病院の研究室に行って、今日の仕事の分をちゃんと片付けてきましたから。そして今日、こうやって抜け出して来ました。

今日ここにお集まりの方は、おそらく大変真面目な女性ばかりでしょうから、男性もちらほらいらっしゃいますが、私のようなチャランポランな男が偉そうなことを言っていいのかなと、ちょっと不安なのですが。それに女性の生き方とか、男女の問題について、私が何か言っても参考になるかなとちょっと不安な点があります。それは、私たち夫婦って、ものすごくアブノーマルですから。ほとんど会っていない。こんな異様な夫婦の話が参考になるかしらと思っているのです。私は結婚して10年半ですが、同じ屋根の下で暮らしたのは2年

ちょっとですから、あとは別居状態です。将来的なことを言うと、これからどちらかが定年でリタイアするまで、同じ屋根の下で暮らすことはありません。延々とこの別居状態が続いていくという、これで夫婦と言えるのかという２人なので、こんなのが参考になるかなと思うのですが。でも今日はこうやって引き受けてしまった以上、何か話さなければいけないなと思います。それで私なりにこんな異様なアブノーマルな夫婦である私たちのことを話すのは、多少意義があるかなと思うのは、私たち医者の世界では、昔から科学的手法で１つ大きな武器があります。それは何かというと、まず「異常を調べて正常を知る」ということです。異常の現象を分析すると、結構正常とは何かということがわかってきますから、私が今日お話するのは、その異常編だと思ってください。ごくごく普通のご家庭では参考にならないかもしれませんが、変な例もあるのね、というぐらいの気持で聞いていただければ十分です。

先ほどもちょっと言いましたようにほとんど別居状態なのですが、それで「夫婦のコミュニケーションはどうしているのだ」とよく言われます。私はいままで誰にも言わなかった我々夫婦の秘密を、労働省が招いてくれたので、労働省の顔を立てようと思って、本邦初公開しようと思っています。その話に行く前に、いろいろイントロダクションが必要です。

話が突然飛びますが、私はサウナが大好きなのです。今日お集まりの方は真面目な方が多いようですね。私は本当にときどききょっとするのですが、特にお年を召した女性で真面目な方というのは、「サウナ」というと「ソープランド」と間違っている人がいますけど、サウナというのはそういう所ではありません。健康的で非常にいい浴場だと思ってください。私はサウナが大好きなのです。いまはちょっと住んでいる所の事情で、サウナが近くにないのでほとんど行っていませんが、私は結婚前６年、そして女房と結婚してからも約６年、合計12年間ほとんど毎日サウナに行っていたのです。だから自宅のお風呂はほとんど使わない、そのぐらいサウナが好きでした。いまでも機会があれば行くのですが。

私は結婚して東京千駄ヶ谷のマンションに女房と暮らし始めたわけですが、このマンションに決めた最大の理由は、歩いて２分の所にサウナがあったのです。私、そのサウナに結婚してから毎日通い続けていたわけです。そのサウナは非常にアットホームな雰囲気のサウナで、あまり広くないのです。私はほとんど毎日行っているわけですから、いちばんの常連客なわけです。私と同じような常連客というのはみんなヤーさんなのです。ほとんどヤーさんばっかりで、私はその中で非常にすんなり順応しているのです。ヤーさんたちも私の人相を見て、違和感なく、非常によくお話していました。私もヤーさんが別に怖いとも何とも思わないし、面白い人たちだなと思っていろいろお話して、向こうも私が慶應病院の医師だなど知るわけがないので、スポーツの話とか、いろいろな話をしていたのです。

私は自宅のマンションに帰って、それからサウナに行くわけです。私が自宅へ帰ると、女

房のほうは忙しいものだから常に女房はいないわけです。女房が私より先に帰って電気をつけて待っていることなど1回もないわけです。私がまず家に帰る。家の片付けをちゃんとして、全自動の洗濯機のスイッチを入れたりとか、そういうこともやってサウナに行くわけです。私はいつもサウナから10時ごろ帰って来るのです。10時ごろ帰って来て、女房と2人で飯になるわけです。実は、私は、サウナに行くときに必ず女房にメモを残して行くのです。

私がサウナに行っている間に女房は家に帰って来るのです。私のメモは必ずこうなっているのです。「サウナ、10時帰宅」、これだけなのです。実は私はこれを始めたときに、ある1つのことを思い付いて、「サウナ、10時帰宅」、これではつまらないなと。2日目ぐらいに気が付いて、やり始めたことがあるのです。それはこういうことです。いちばん最後に必ず「ツマ」で始まって「オット」で終わる電報文を書くことにしたのです。もちろん全部片仮名です。句読点もないものだから読むのは大変なのです。例えば例を言うとこういう調子です。「サウナ、10時帰宅」しばらく余白があって、「ツマヲアイスルオット」とか、そういうふうに書いているわけです。それを毎日違うバージョンでいこうと。私はこれをずっと毎日やったのです。ちょっと恥ずかしくて言えないようなバージョンもありますが、差し障りがなくて言えるような内容だと、「ツマヲオモイヤルセカイイチヤサシイオット」とか、そういう電報文を毎日書いているのです。これは私が結婚してから、女房と私が同じ屋根の下で暮らしているときには毎日やっています。1日も欠かさずにやるのです。

なぜこんなことをしているかというと、お互いにすごく忙しいので、2人で会える時間てほんの数時間しかないわけです。飯を食っているときだけとか。それで、せめて生活に彩りを加えたいじゃないですか。それから、俺はお前のことを考えているよ、というのを常に向こうに与えてあげたいということで、私は毎日やっています。

アメリカに女房が行ってしまっているときは、結構手紙を書くのです。結構私は筆まめですから手紙を書きますが、その手紙の最後も必ず例の電報片仮名文で締め括っています。結婚して10年経ちますから大変なのです。私は文章を書くのは嫌いではないですが、「ツマ」で始まって「オット」で終わるというこの規則の中で、1年365日のバージョンを考えるのって、全知全霊を傾けなければできないのです。私は本当にそれで、次回のこの「ツマ・オット」の電報文を何でいこうかとか考えています。ということは、毎日女房のことを考えているのです。どうやってやれば、あいつを笑わせることができるかとか、どうすれば女房が寂しくなくて、本当に亭主の私から電報文をもらって喜ぶかと、こればかり考えていて、頭の中はほとんど毎日、女房がアメリカに行っているときも、女房のことばかり考えています。頭の中の9割は女房のことです。あとの1割で医業行為をやっているくらいですから。ただ、この「ツマ」で始まり「オット」で終わる電報文スタイルは、私の人生にとってもものすごく

彩りを加えてくれているし、私が女房のことを思っているということは、女房におそらく伝わっていると思うのです。別にいやがっていませんから、「万起男ちゃん、こんなことやめて」などと言いませんから、結構楽しんでいるに違いないのです。だってもらったほうって、やっぱり悪い気はしませんよね。何となく、自分のことをいつも思ってくれていて、夫から始まらないで必ず妻から始まる電報文ですから。私が自分で妙に自慢して申し訳ありませんが、私はやっぱり結婚して数日後に気付いた、この「ツマ・オット」の片仮名の電報文というのは、私の人生の中では大ヒットに属するのではないかと思っています。

変なのろけ話から始めましたが、同じ屋根の下で暮らしていようが、私たち夫婦のように異常な夫婦が離れ離れで暮らしているような形態でも、私は、何かしら常に相手のことを「俺思っているぜ」とか、そういうシグナルを送るのは重要なことだと思うのです。私の場合はとりあえず「ツマ」で始まり「オット」で終わる片仮名電報文という手段を編み出しましたけど、どなたでも、「私はあなたのことをいつも思っていますよ」というシグナルを送り続ける努力というのは、やっぱり欠かさないでやり続けたほうがいいと思います。

女房がアメリカに行っているときに、先ほどもちょっと手紙でいろいろな「ツマ」で始まり「オット」で終わる電報文を送ると言いましたが、ときどきは私は電報文シリーズというのでやることもあるのです。手紙を開けると全部電報文というもの。自分で例えば20何本か考えて、全部1行ずつの電報文で書くのです。ちなみにここで1つ、最も女房にウケタ電報文をご披露しようと思います。それは、女房がまだ宇宙に行く前のことなのですが、チャレンジャー事故が起こってしまって、いつ日本人宇宙飛行士がスペースシャトルに乗れるかわからなくなってしまって、毛利さん、女房、土井さんの3人が日本でやることもなくなってしまって、アメリカに1年半留学したときがあるのです。もうそのときは本当に私の女房だけでなくて、毛利さん、土井さんの3人は結局のところ、日本人はスペースシャトルに乗れないのではないか。自分たちは宇宙飛行士に選ばれたけど、飛べない宇宙飛行士で一生終わっちゃうんじゃないかなと、不安に満ちた留学生活をしていたときに、私が女房に、エアメールで手紙を書いて、2、30本の電報文シリーズを送ったのです。その中で1つ女房にものすごくウケタのがあります。それは私がこういうふうに言ったのです。「ツマハナニヲスルヒトゾトオモウオット」。これです。これが異様に女房にウケタのです。何でこんな電報文を紹介するかというと、「ツマヲアイスルオット」とか、「ツマヲオモイヤルセカイイチヤサシイオット」とか、こういう甘っちょろい電報文だけじゃないぜ、ということを紹介したかったのです。

女房はその当時、自分は一体何なのだろうと悩んでいたわけです。医者なんだろうか。医者はもうやめてしまいましたし、宇宙飛行士といったって、宇宙に行ってはじめて宇宙飛行

士なのに、宇宙にも行っていない。行く予定もない。どうなるんだろう。私は一体何なんだろうと悩んでいるのではないかと思って、そこで一発、いやみったらしく「ツマハナニヲスルヒトゾトオモウオット」というのはいいじゃないですか。痛烈に皮肉ってやったのですが、これがいちばん女房は気に入っていました。

ちょっと間違えれば強烈なブラックジョークみたいになってしまうのですが、それでも私の場合は女房にこんなことを言ったって、女房は喜ぶだけで怒るわけはないよなという自信がありますから。これは一歩間違えれば危険かもしれませんが、とりあえず私は女房のことを考えている証拠ですから、これでも本当に喜んでくれてよかったなと思っています。

のろけ話から始まりましたが、私が今日いちばん言いたかったのは実はこのことなので、「とにかく常に反復刺激で相手にシグナルを送れ」、これです。今日、ほかに私はこれから30分ちょっと話しますがほとんどついでです。あまり参考になるようなお話はできないと思いますが、時間があるのでいろいろ話します。もう一つ、皆さんにどうしてもお話したいことがあるので、これは忘れない内にお話しようと思います。それは宇宙飛行士のことなのですが、私は一応宇宙飛行士の亭主ということになっているので、宇宙飛行士のこともちょっとお話したいと思い、１つお話します。それはチャーリー・ボーデンという宇宙飛行士の話なのです。

私は女房と結婚するまで宇宙飛行士などとは会ったことは１回もありません。昔から興味は持っていますが、実物と会ったことなど１回もなかったのです。ところが女房と結婚したために、本当に本物の宇宙飛行士と会う機会がもてるようになったわけです。

チャーリー・ボーデンという男は、私が生まれて初めて会った男性宇宙飛行士です。女房以外で私が初めて会った宇宙飛行士というのは女性でした。２番目も女性だったのです。このチャーリー・ボーデンというのは３番目で、かつ、私が会った最初の男性宇宙飛行士です。

どういう状況で会ったかというと、女房がアメリカで訓練をしているときにアメリカに女房を訪ねて行ったのです。私も将来女房のスペースシャトルの打ち上げに向けて、留学することが決まっていましたので、いまのうちにアメリカの自動車運転免許を取ってしまおうと思って、正月休みに女房の所へ訪ねて行ったときに、女房に連れて行ってもらって、運転免許を取りに行ったのです。そこにチャーリー・ボーデンが来ていたのです。「これがチャーリー・ボーデンよ」と女房に紹介されて、私は初めてそこで「ああ、これが俺が初めて会うアメリカ人の男性宇宙飛行士だ」と、ものすごく宇宙飛行士に興味がありましたから、胸ときめいたわけです。いろいろ挨拶をして話をしたら、チャーリー・ボーデンは娘さんが運転免許を取るので付き添いで来ていたわけです。いろいろ話をしたときに、ものすごくもの静かに話して、私から見てオーラを感じるのです。すごく格好いいなぁという感じだし、しゃ

べり方もものすごい低音で格調高いのです。身体を見ても無駄な肉が全然付いていない。ビシッと鍛えぬかれた身体で、本当にすごいなと思ったのですが、後で女房に聞いたら、そのチャーリー・ボーデンという男は、宇宙飛行士の仲間の中で抜群の人気があって、チャーリー・ボーデンと一緒に宇宙に行ってみたいという宇宙飛行士がたくさんいるというのです。チャーリー・ボーデンが機長を務めるスペースシャトル飛行に部下として乗り込みたいという若い宇宙飛行士が一番多いというのです。

「へええ、やっぱりあいつならそうだよな」と、私も思いました。これはすごいなと。なにしろ私も人間ウオッチングが好きですから、偉そうなことを言うとなんですが、私が見て、「これはすげえ男だ」というのがわかるわけです。私はそういう機会にチャーリー・ボーデンと会ったわけですが、その後、運転免許もちゃんと取っちゃって、次にアメリカに行ったときには留学で行ったのです。

アメリカに留学して、私はテキサス・メディカル・センターという所にあるMDアンダーソン・キャンサー・センターという病院に留学したのです。皆さんなかなかイメージが湧かないと思いますけど、テキサス・メディカル・センターというのは日本にはない組織なのです。東京ドームが何個も入るぐらいの広大な土地に、いろいろな病院がたくさん建ち並んでいるのです。日本でいうと、ちょっとイメージがつかみにくいでしょうけど、東京大学医学部の隣に慶応大学医学部があって、その隣に聖路加病院があってと、こういう感じです。全然経営母体の違う大学、民間、公営、ありとあらゆる医療機関を全部集めてしまったのです。私はそこで留学生活を始めたのですが、自分はその中の１つの病院だけに留学しているわけですが、ちょっと面白くて、テキサス・メディカル・センターの中を散歩して、いろいろな施設を歩いて見て回ったのです。そして、ある有名な病院の廊下を歩いていたら、チャーリー・ボーデンの写真が飾ってあるのです。何だこれはと思って、写真の下の説明を読んだら、「チャーリー・ボーデンは現在宇宙飛行士である」と彼が宇宙飛行士であることを紹介しているわけです。なおかつ、彼はこの病院の評議委員会のメンバーであると書いてあるのです。「へええ、チャーリー・ボーデンって、この病院の評議委員までやっているんだ、すげえなあ」と思ったのです。テキサス・メディカル・センターという、結構有名な病院がたくさん入っている場所ですが、このテキサス・メディカル・センターの中に評議委員のメンバーとして名前が記されていて、写真が飾ってある宇宙飛行士というのは、チャーリー・ボーデンだけです。

いままでチャーリー・ボーデンの話を随分してきましたが、実はこのチャーリー・ボーデンというのは黒人なのです。チャーリー・ボーデンは黒人として３番目の宇宙飛行士です。私は何を言いたいかというと、皆さんご存じないでしょうが、黒人が宇宙飛行士として宇宙に

行けるようになったのは1980年代になってからです。その前は誰一人行っていません。もちろん月面に立った12人の男は全員白人男性です。アポロ時代に黒人など１人も宇宙飛行士に採用されていません。スペースシャトル時代になって、初めて採用された。私はチャーリー・ボーデンの前の２人というのは名前とか略歴は知っていますが実際に会ったことはないので、どういう男なのかわかりませんが、黒人として宇宙飛行士になったわずか３人目の男のチャーリー・ボーデンという実物を見て、私は何をいちばん最初に思ったかというと、こんなすごい男が、なんでいままで宇宙に行けなかったのだろうと思ったのです。

アメリカは何十年間も黒人を宇宙飛行士に選ぶことはしていませんでした。でも選び始めたら、わずか３人目なのに、これほどの男を生んでいるわけです。白人の宇宙飛行士仲間からも、「あいつの機長の下で宇宙へ行きたい」と言われるような宇宙飛行士に黒人がなっちゃっているわけです。私は人間の能力とか、人間の能力を活用するということに関して、やっぱりチャーリー・ボーデンという男と会って、いろいろ話をした経験というのは本当によかったと思っています。

ついでに言っておきますが、アメリカでは女性が宇宙に行けるようになったのも、1980年代なのです。実はスペースシャトルになって、初めて白人の男性以外の男性も、そして女性も宇宙へ行けるようになったわけです。つまり白人男性以外に初めて門戸は開かれたわけです。

私は実はアメリカは失敗したと思っています。もっと前に黒人と女性を宇宙へ行かせるべきだったと思っています。どうしてかというと、行かせていたら絶対にできたに違いないのです。絶対にできたはずです。アメリカは時期を完全に誤ったと思っています。私がいまから思っても仕方がないことですが、先ほどちょっと言いましたが、月面に立った人間は12人なのですが、今日おいでの皆さんも女性が多いですが、月面に立った12人の中に女性がいたら、どんなに素晴らしかったかと思いませんか。あまり興味がなくて思いませんかね。私などは痛切に思います。12人の月面に立った人類のうち、半分ぐらいが女性だったら、本当に素晴らしかったと思います。でも、残念ながら全員男性だったわけです。

私はその時代時代の状況を反映しているので仕方がないとは思いますが、過去を悔んでも仕方がないですが、私は痛切に思っています。本当にもっともっと早く宇宙に女性を行かせればよかったのにと。あまり過去のことばかり振り返らないで、将来的なことを言っておくと、皆さんは宇宙に興味はないかもしれませんが、こういうことだけは知っておいてくださいということがあります。それは、いま女房が訓練をしているＮＡＳＡで、最も長期大プロジェクトと考えられているのは、人類を火星に送るプロジェクトです。本当に今までほかの天体といったら月にしか行っていません。それを惑星にまで広げようということで、火星に

人類を送ろうと考えているのですが、火星は月と違ってとても遠いので、往復２年もかかります。２年もかかってしまうので、乗組員をどういう構成にするかというのが大変に問題なわけです。まだ、実際にＮＡＳＡからはどういう人が飛んで行くかという発表はありませんが、一つ皆さん機会があったら、周りの方たちにも宣伝してください。

実はマイケル・コリンズという元宇宙飛行士が書いた『2004年火星の旅』という本があるのです。マイケル・コリンズという元宇宙飛行士はアポロ11号でニール・アームストロングとバズ・オルドリンという２人の宇宙飛行士が初めて月面に立った時、その２人が月から帰って来るのを待って、月の周りをクルクル回って待っていた男です。ですからわざわざ月まで行ったのだけれども、自分は月に降り立たないで、２人のためにずっと月の周りを回りながら待ち続けていた男なのです。このマイケル・コリンズという男が、火星に早く人類を送るべきだと提唱しているのです。そのときに彼は乗組員をきちんと決めているのです。総論ばかりではなく、各論も決めているのです。こういう国からこういう人たちをピックアップして、火星探険隊を組むべきだと言っているのですが、どういうメンバーかというと、往復２年もかかるので、４組の夫婦にしろと言っているのです。これは本当に真面目な提案なのです。４組の夫婦でないと、２年間も孤独で精神衛生上よくないというのです。

この４組の夫婦なのですが、彼の言っている４組というのはアメリカ人夫婦、ロシア人夫婦、フランス人夫婦、日本人夫婦です。日本人も入れてくれているのです。本当に嬉しいなと思います。このマイケル・コリンズという男は、さっきも言ったように大変な略歴を持っている男です。アポロ11号指令船パイロットというすごい肩書を持っていて、その後国務次官補にまでなり、その後スミソニアン航空宇宙博物館館長にまで登り詰めた男です。そしてＮＡＳＡに向かって、そして国民に向かって、「早く人類を火星に送るべきだ」と提唱しています。そして、４組の夫婦を、国までちゃんと挙げているというすごい男の人で、先見の明もある人なのですが、実は私はこのマイケル・コリンズの本を読んで、「しょうがねえなあ」と思った点が１つだけあるのです。

それは何かというと、いま言った乗組員、結局４組の夫婦ですから男４人に女４人です。火星に行くわけですから、みんなそれぞれに役割分担を持っているわけです。いろいろな技術を持っている８人なわけです。そういう人を選んでいるわけですが、その中に医師が２人いるのです。もちろん８人が長期の旅行に行くわけですから、健康を司る医師をその８人の中に入れなければいけないのですが、なぜかマイケル・コリンズの決めた役割分担でいくと、医師は２人とも女性宇宙飛行士なのです。こういうのはよくないです。役割分担を固定しています。これは非常によくないです。

私はいつも声を大にして言っているのですが、いままで世界の宇宙飛行士で女性というの

は異様に医師が多いのです。本当に医師ばかりというか、女性宇宙飛行士は医師が多いです。こんなことは皆さんはあまり考えないでしょう。女性が宇宙に行くなどというと、その人が一体もともとどんな職業だったのかなどというのは、関係ないと思うかもしれませんが、これは本当によくないです。私の女房もたまたま医者だと思っている方も多いと思いますが、私はたまたまとは思っていないので、このままいくと、女性宇宙飛行士は医師だらけになってしまいます。マイケル・コリンズのような男ですら、先見の明があるのに、何で医者が２人とも女などと、固定観念で考えているのかと失望しました。いろいろな人が、女性が何、男性は何と決めてしまうというのは非常によくない、役割分担がいけないと言っていますが、私から言わせれば、結構自分で先見の明があるとか、自分は女性のことを思っているとか、自分は女性を対等に扱っているのだと思っている人でも、結構落とし穴のような役割分担意識というものを持っていますので、本当に気を付けないと、いくらでも落とし穴に入ってしまいます。また、ちょっと偉そうなことになりかけたので、話を変えます。

私の女房のことをちょっとお話しようと思うのですが。先ほど労働省の「いま個性が性を超える」というコピーの話をしましたが、私の女房は確かに飛んでいる女です。これはものすごいです。主人である私にしかわからない点が多々ありますが、私の女房は個性という領域すら超えていますから、ちょっと想像を絶するところがあると思います。それを何とか言葉にして皆さんにお伝えしたいし、そういう女を相手に私が何をしているかというのを、なかなかニュアンスをお伝えするのは難しいのですが、できるだけ言葉で表現してみようと思います。

私の女房はおそらく日本一、ひょっとしたら世界一だと思いますが、人間に対する差別の意識がありません。限りなくゼロだと思います。ですから男であるとか、女であるなどという域を超え、人種も超えています。自分はたまたま日本で生まれてしまったぐらいの認識しかないのです。何かを物差しにして人を差別するなどという発想は全然ありません。その１つのいい例をちょっとお話しますが、女房は人と人との間柄で、上下関係でものを見るということを最も嫌っています。ですからこの人のほうが上とか、私よりあの人は下だとか、そういう意識はほとんどないです。ですから私に対しても、主人に仕えるなどという気は全然ないわけです。こんなのは私の女房にとっては死語に近いです。夫に仕えるなどという言葉は全然ないわけです。これは私も慣れているので、何とも思いませんが、これは本当に徹底しています。

多くの人が女房に向かって、「女性でありながら宇宙に行って素晴らしいですね」と言って下さいます。女房はニコニコ笑っていますが、非常に女房にとってはずれがあると思います。私は別に女だから行ったんじゃないというのがありますから。私は仕事をしに宇宙に行った

と思っているので。「女性の身でありながら宇宙に行った」などと言われて、カチンとくるほど女房は子供ではありません。でも絶対に違和感を感じていると思います。というのは、私の女房は女であるということを武器にして働いたことは１回もありません。これは徹底しています。女房は宇宙飛行士になる前は心臓外科医でしたが、私も女房といろいろ話していて聞かされています。医者という世界は日本の社会では相当封建制の残っている所です。女房は何でも正直に私に言いますから、こう言っていました。「心臓外科医として働いているとき、私は男性心臓外科医の３倍頑張った」と言っています。なぜか。３倍頑張って、やっと対等に扱ってもらえる。男性心臓外科医が１回失敗して、その信用を取り戻すのに１年かかるのだったら、私は３年かかる、と言っていました。

これはどこの社会でもそうでしょう。女が失敗すると「しょうがねえなぁ、あいつは女だから」と言われるわけです。これは心臓外科医の世界でも間違いなくそうでした。そういう中で頑張ってきたので、自分が女性だからという甘えで生きていたら、到底やっていけないわけです。心臓外科医の時から私の女房は必死になって、３倍頑張ろうという意識で頑張ってきて、そして宇宙飛行士になったわけです。結婚してから女房が私にポツンと言った言葉があります。「みんな宇宙飛行士って大変でしょう、大変でしょうって言うけど、私は全然そうは思わない。自分の外科医時代を思ったら、宇宙飛行士の訓練なんて屁の河童」と言っていました。この例でわかるように、別に宇宙飛行士が飛び抜けて大変だなどということはないと思うのです。心臓外科医と同じように大変な職業だって、ゴロゴロ転がっているはずです。私の女房は宇宙飛行士になって訓練しても、自分が女であることを意識したことはほとんどないと思います。そんな世界ではありません。宇宙飛行士の訓練というのは、女性に対する配慮などほとんどありません。プロは男と女はほとんど関係ないわけですから。あらゆる設備、あらゆる施設、あらゆる訓練方法が男女の区別なく適用されていくので、女性であることを意識したらやっていけません。

その中でちょっと例を挙げておきます。スペースシャトルの打ち上げ１週間ぐらい前になると乗組員は世間から隔離されるのです。クルークォータースという乗組員宿舎に完全に隔離されます。隔離されると会えるのはほんの数人、ＮＡＳＡの専門家とか、配偶者である私たちとか、本当に限られた人間しか会えなくなるのですが、そのクルークォータースというのは個室になっているのです。女房たち７人の宇宙飛行士が一斉に隔離されたわけです。部屋がどうなっているか。個室ですから１人に１部屋は当然です。ところが、結構質素なのです。本当に狭い部屋が１部屋あるだけです。トイレ、シャワーはみんなで一緒に使うのです。女性用シャワールームなどないのです。トイレもそうです。男性と一緒に同じトイレ、同じシャワールームを使うわけです。

ところが、一部屋だけ、いちばん奥まった所に１つだけ、ちょっと広めの部屋があって、その部屋だけ専用のトイレとシャワールームが付いているのです。この時、みんなと一緒に隔離された機長が宿舎に入居するときに、みんなの前でこう言ったそうです。「なあ、みんな、今回の乗組員の中には千秋という女性がいるから、あの一番いい奥まった部屋、トイレ、シャワーを１人で使える奥の部屋は、千秋にやろうよな」と言ったのです。

でも、そんなことを女房が受け入れるわけがない。私の女房は即座に「ノー」と言っています。その部屋は機長が使う部屋ですから、そんなのは当たり前です。そこで、もし「あっ、ラッキー」とか言って、その部屋に入ったら、それは駄目です。それは仕事をするプロではありません。誰が見たって、いちばんいい部屋は機長が使うべきなのです。女房はそのときにニコッと笑って「ノー」と言って、「その部屋は機長が使ってください」と言って、自分は以後約１週間、男性宇宙飛行士と同じトイレ、同じシャワールームを使っていました。私はこのぐらいでなければいけないと思います。本当に女であることを武器にするというと語弊があるかもしれませんが、女であるからということで、何か配慮をしてもらうということは、絶対にやめてほしい。

全部配慮なしというわけではありません。多少の配慮、例えばご参考までに言っておきますが、私の知る限り、ＮＡＳＡが女性宇宙飛行士だけにしてくれた細やかな配慮というのは１つしかありません。それは何かというと、宇宙に持っていく下着を自分で選べる、ただこれだけです。男性宇宙飛行士の場合は下着は全部ＮＡＳＡからの支給品です。これを持っていけと言って渡されるだけです。そのときに、女性だけは自分でデパートに行って、買ってくることが許されています。それもやっぱりＮＡＳＡの係員が横に付いているのです。だってお金は税金から出すわけですから、それを何か色柄の派手目なパンティを買うなんていったら許されませんから、ちゃんと使い勝手が良くて、納得できる安いものを買わされるのですが、それでも自分が宇宙に持って行く下着は自分で選べる。私の知る限り、男性宇宙飛行士にはない女性宇宙飛行士への配慮というのはこの１点です。あとは全部一緒です。

それから宇宙に行っている間、皆さんは当然ご存じだと思いますが、スペースシャトルに男子用トイレ、女子用トイレなど区別はありませんから、みんな同じです。狭いトイレの中に入って、みんなが同じトイレ装置を使うわけです。ですから男女の区別をして、何か女性に配慮をしてもらえると甘えていたら、宇宙飛行士はやっていけるような職業ではありません。私の女房はこういう中で毎日訓練をしているわけですが、さっきも言ったように、心臓外科医時代から、そんなことは全然期待もしていないので、むしろ女は３倍頑張らなければ駄目なのだ、誰も認めてくれないのだという意識でいますから、初めから甘い考えとか、何か私が女性であるということで配慮してくれなどという思いは一かけらもなく、結構対等に

アメリカの宇宙飛行士と渡り合っているはずです。

女房は私１人を日本に残して、好き勝手にアメリカでやりたい放題のことをやっていますが、私が心の根底で、それを本当に応援して許しているのは、女房のこの姿勢があるからです。私は女房が女を武器にしていたら張り倒します。そして女であることを利用して、職場で甘えているような女だったら、私はこんな生活はやっていられません。これは女房が本当に甘えていないし、男と女と対等で渡り合わなければいけないという覚悟をしているので、日本に私が残されても応援してあげようかなと思っているわけです。

いろいろな職業があるのですべての職業についてこんなことが言えるのかどうか私にはわかりませんが、私の女房の例を言うと、こういうことになるわけです。

私は毎日すごく幸せです。本当に幸せです。だって、さっきも言ったように、毎日、「ツマ・オット」を考えているのですから。あんまり「ツマヲアイスルオット」じゃつまらないじゃないですか。だから毎日ニューバージョンを考えているのです。これを考え続けている幸せもあるし、私は家に帰って妻が待っていない生活が全然苦にならない男なのです。私のモットーはこうなのです。私の女房って、本当にガッツがあるので、一生懸命女を武器にしないでアメリカで闘っているわけです。女房は必死で、本気で人生を真面目に走り抜こうとして走っているわけです。私はどうかというと、そこまでガッツがないので、情ないなと思うのですが、女房と比べたら全然ないです。私は女房の人生の伴走者だと思っているのです。一緒に横を走る伴走者で、私は自転車に乗る。これは一緒に走ったらたまらないので、私は女房が走る横を自転車で走りながら、ときどきチャチャを入れる、「頑張ってる？」とか。これに徹しようと思っているのです。

それも結構女房ってからかいがいがあるので、ときどきちょっかいを出しては女房を笑わせて、笑顔を見ていればオーケーという感じなので、今までの10年間も大体このパターンです。必死で生きているのは女房で、横で楽ちんしながら、ときどき冗談を入れているのは私という。でも、これはなかなか楽そうでも大変なのです。ペースに合わせて自転車だって速度を変えなければいけませんし、チャチャを入れるのも入れ方のタイミングがあるわけです。それから相手を喜ばせたりしなきゃいけない。とにかく同じことばかりやっていると、向こうも飽きてしまいますから、いかに相手を驚かせて笑わせるかとか、楽しい気分にさせるアイディアを生み出すのは大変です。

私は大学で研究もしていますが、研究のアイディアよりも、女房のためのアイディアを生み出すことで毎日を送っているような感じです。女房は本当になかなか忙しくて、亭主である私の面倒を見る暇もないし、何かをする暇もないし、結婚してから私は女房に何かをしてもらったことは１回もないです。全くないことを女房も自覚しているようですが、それでも

私が文句を言わないのは、女房が本気で闘っているのを支えてあげたいという気持があるので、その支え方もあまり必死にならずに、気楽にいこうぜという感じでやっているわけです。ですから、私は女房に文句など１つも言わないのです。文句１つ言わず、ときどき笑わせるためにチャチャを入れているだけという夫婦ですけど、女房も結構テレ屋ですから、あまり私には言いませんが、私のジョークというのはものすごく女房に受けるのです。私は医師の免許証を剥脱されたら、漫才の作者になろうと思っているものですから、そのぐらい私は全知全霊を込めて、女房を笑わせること、女房の訓練の合間に息抜きになる何かを考えることというのをやっていますから、女房は家庭的には私のようなこんな優しい夫を持っていて、本当に幸せだと思います。

職場でも、宇宙開発事業などというのは、結構飛んでいる人が多いのです。宇宙などに職場を求める人というのは結構飛んでいます。皆さんにご紹介したい男性が１人います。女房が1994年に宇宙に行ったときに、アメリカで２年間訓練をしていたのですが、そのときに宇宙開発事業団ヒューストン・オフィスの所長だった方がいるのです。名前はご本人の了解を得ていないので言いませんが。宇宙開発事業団のヒューストンにおける出先機関のトップの方です。この方は男性で私より３つか４つ年下だと思います。この方がものすごい先見の明というか、「いまは女の時代だ」と、これが口癖なのです。「これからは女だけだ」とか言っている方なのです。本当に女だから駄目だとか、男だからどうだとかと、そういうことを一切言わない人で、ご本人は自分で料理を作るのが大好きで、ときどき宇宙開発事業団の駐在員の奥さんたちを集めて、料理教室を開いているのです。一生懸命教えてあげているという方で、そういう方がたまたま女房が宇宙飛行に向けて２年間訓練をしていたときの所長でいたというのは、ものすごく恵まれていたと思います。

「全く女のくせに宇宙に行くのか、こいつは」などという人が所長をやっていたとか、「全く本当に、俺は所長なのに、女のためにこんなことをやらなきゃいけないのか」という人が世の中にはたくさんいるじゃないですか。私が見ていても本当にいると思います。でも、たまたま女房の場合は、そういう恵まれた所長がいてくれたお蔭で、全面的にバックアップしてくれたわけです。私の女房は家庭では私に恵まれ、ヒューストンではそんな優しい所長に恵まれ、ものすごく幸せだったと思います。

残り時間も少なくなって、何かとりとめもない話をしたのですが、最後に一応基調講演者なので、立場をわきまえて、まとめぐらいを言っておかなきゃいけないなと思うのですが、まとめというのは何かというと、よく私は世間の方に言われるのは、「向井さんは結婚して、奥さんが旦那さんの面倒も全然見ない、離れ離れの暮らしなのに、よく耐えていますね」とか、「何で奥さんにあんなに好き勝手なことをさせるんですか」とか「宇宙飛行って、１回行きゃ

いいじゃないですか」とか、「何でこりずに２度目を目指しているのを許しちゃうわけ」とか言われるのです。これもはっきり言って余計なお世話なのですが、そういうふうに言ってくれる方がいるので、私はよく言うのですが、人間て、好きなことをするに限るのです。絶対にそうです。どんなに人から与えられて、これが重要な仕事なんだよとか、これは本当にやりがいのあることなんだよと言われたって、本人がそう感じなかったら、何にもならないです。これって結婚に似ています。周りのお年寄りが若い女性のためにいろいろな見合写真を持ってきて、「何でこの人と結婚しないの」と言ったって、本人が嫌だったら嫌ですもの。これは本当にそうです。人間て、自分が本当にやりたいことをやるのがベストです。私は昔からそう思っているので、自分自身もそういう性格なので、自分にとって、最も大切な人であるのは誰かといったら女房ですから、私にとって最も大切な人は女房、その女房が本当にやりたいことを邪魔するなんて、私には考えられないのです。これは世の中の男が全部そうだと私は言いません。でも、私は絶対に女性は希望を捨てるべきではないと思います。なぜかといったら、私は医者として声を大にして言いたいのですが、人間て絶対に人をわけもなく殴れないのです。例えば突然相手を殴り倒すとか、何かよほどの憎しみがない限り、人間て他人を殴れないでしょう。

私から言わせれば、ある１人の人間が、これをどうしてもしたいと言ったときに、それを徹底的に邪魔をすることって、人間の本性から外れていますから、それは殴っているのと同じです。本人が本当にやりたいことをやらせないというのは、理由もなく人を殴ることと同じです。私は人間である以上、絶対に最終的には本人が本気でやりたいことがあったら、必ず周りは動きます。絶対に動きます。「いやぁ、でも世の中の男に、そんな男はいないな」と言っても、私は絶対に断言します。やる本人が頑張れば、絶対に周りは動く、これは間違いないと思います。私は医者として、人間とは何かということを考えたときに、絶対にわけもなく人は他人を殴れない。これは私が絶対に信じていることなので、周りに何か邪魔をするものがあっても、絶対に諦めない。しゃべり続ける。主張し続ける。やりたいと言い続ける。この言い続ける、主張し続けるということが最も重要だと思います。

私だって、できることなら、もちろん大好きな女房と毎日同じ屋根の下で暮らして、のほほんと明るく楽しく生きていたいです。家に帰ったら、女房がにこにこと笑って待ってくれているとか、そういう生活をしてみたいと思うことがやっぱりフッとあるのです。ないわけではありません。私は女房にほれているので、ほれた女房と離れ離れのほうが幸せなどという馬鹿な男はいないのですから。ほれていたら、いつも一緒にいたい。でも、私は女房が本当にやりたいということを邪魔をするわけにはいかないではないですか。私と暮らすよりもあっちがいいと言ったのですから、しょうがないです。ですから、私はそのとき深く悩んだ

りしなかったのは、人間は絶対にやりたいことをやるべきだというのが私のモットーなので、そういう人生を選んでいるわけですが、皆さんにも本当に繰り返しますが、自分が本当にやりたいことを周りの人間に言い続ける。これは理想論ではないと思います。私は自分の経験からいって、絶対に周りが動きます。時間がきたのでこれぐらいにしておきます。どうもありがとうございました。

Ⅴ　シンポジウム

「二人の生き方、考え方」

コーディネーター	女優・キャスター	石　井　苗　子
パ　ネ　リ　ス　ト	慶應義塾大学助教授	向　井　万起男
	ファッションデザイナー	花　井　幸　子
	㈱花井代表取締役	花　井　喜　俊

○司会　ただいまから、「二人の生き方、考え方」をテーマにシンポジウムを開会いたします。

最初に講師の方々をご紹介いたします。本日のコーディネーターとして石井苗子さんをお迎えしております。石井さんは同時通訳者を経て、88年から「ＣＢＳドキュメント」のキャスターをお務めになり、現在は「ＣＮＮ週刊地球テレビ」のキャスターとしてご活躍でいらっしゃいます。91年、伊丹十三監督の「あげまん」で女優としてデビューされ、パルコ劇場の「ジェフリー」にもご出演になり、テレビドラマでもご活躍でいらっしゃいます。近著に『大人の女になりなさい』がございます。また、この４月からは聖路加看護大学にご入学になりまして、学生生活を送られていらっしゃいます。

次にパネリストの方々をご紹介いたします。まず最初は、先ほど楽しいご講演をいただきました向井万起男さんです。次にファッションデザイナーの花井幸子さんです。花井幸子さんは、1937年、横浜市にお生まれになり、長沢節主宰セツ・モードセミナーでファッションイラストレーションをご修了されました。64年、ファッションデザイナーとして独立。68年にオートクチュールのブティック「マダム花井」を開設され、

73年度日本ファッションエディターズクラブ賞を受賞されました。生活面のすべてがデザインの場として、多数のライセンス商品を展開していらっしゃいます。現在、多方面でご活躍でいらっしゃいます。

最後に株式会社花井代表取締役の花井喜俊さんです。花井幸子さんとはご夫婦でいらっしゃいます。花井喜俊さんは、1935年、長野県にお生まれになりました。13年間勤務されました富士電機製造株式会社を脱サラされ、経営面から幸子夫人をサポートするため、67年、有限会社アトリエ花井を設立されました。その後、30年間二人三脚で経営手腕を発揮され、現在、社員300名、全国に50店舗を有する株式会社花井を育て上げられました。また、コンピューターを得意とされ、独自につくり上げられたプログラム名は「アイム・ハッピー」とおっしゃるそうです。

それでは、シンポジウムを始めさせていただきます。石井さん、どうぞよろしくお願いいたします。

石井苗子氏

○石井　ありがとうございます。ただいまご紹介に与かりました石井苗子です。どうぞ皆さん、よろしくお願いいたします。これから4時までの間、楽しくシンポジウムを進めていきたいと思います。大変厳しい方々がお集まりだということを楽屋でお聞きしました。私はずっと劣等生だったもので、職員室がいちばん嫌いでしたので、大変緊張しておりますが、今日は心強い皆さんがずらっとパネラーとしてお並びでございます。

それでは、シンポジウムを進めるに当たりまして、もう皆様十分ご存じでいらっしゃると思いますが、婦人週間は、昭和21年4月10日に婦人参政権が成立いたしましたことを記念しまして昭和24年から設けられました。女性の国会議員は、39人その年に選ばれたそうです。どっと40人近く女性国会議員が登場した。さぞかし華々しかっただろうと思います。それで花井さんが選ばれたわけではございませんけれども、花のように女性が国会に現れたのだと思います。隣に向井さんがいらっしゃって、女と男を区別するななんて怒られそうですけれども、その花のデビューを飾りまして、4月10日から1週間が婦人週間です。男女がお互いに生き生きと生きるためにいい関係はどのようなものであるのか、という意見交換をシンポジウムでやっていきたいと存じます。

「21世紀に向けて自分らしい生き方ができる社会を創ろう」がこの婦人週間のテーマですが、社会にはまだ男女の役割分担意識というのが根強く残っております。個人個人が職場、あるいは家庭の中で、自分らしい生き方を実現する。そうするには、社会

にはまだ様々な制約があるように思われます。多くの方が自分らしい生き方を探して、自らの能力を発揮するという意味で望みを持ちながら、どのようにしていけばいいかというさまざまな方策は、まだまだ考える余地があるのではないでしょうか。

特に家庭に焦点を当てた場合、妻と夫の双方が自分らしい生き方を実行するにはどうしたらいいかと、大変難しいテーマだと思います。お互いが理解し合い、協力し合うと。皆様そうおっしゃいますけれども、一口にその関係を成立させていくにはどうすればいいのだろうかと。それから、いまあることからもっと前進するために、新しい関係に向かっては、一番最初に第一歩として何をやったらいいのだろうかと。それぞれが、個人個人が自分だけの第一歩というのを皆様お持ちだと思います。

そこで、今回のシンポジウムでは、二人の生き方や考え方というものをテーマにいたしまして、各パネリストの方々がいかにご夫婦の間で個性を活かして、自分らしい生き方を実現されてきたのかをお話いただきたいと思います。21世紀に向けて、女性も男性も個性を活かして、生き生きと暮らしやすい社会をつくるためにどうしたらいいか、というのが本日のメインテーマです。

そこで、まず最初に花井幸子さんのほうから。ご経験を活かして、女性が独立して仕事を持つということ。独立して女性が会社の社長をやっていらっしゃる方だとか、独自の個人の経営で仕事を活かしていらっしゃる方、あるいは家庭で個人経営をしていらっしゃる方、たくさんいらっしゃいますが、まだそれが社会的に認知されなかった時代にデザイナーとしての独立を果たしました。いわば女性起業家のフォーラナーといいますか、先駆者でいらっしゃいました花井幸子さんからお話をいただきたいと思います。デザイナーへ転身なさった経緯とか、第一線のデザイナーとして仕事を続けることの喜びとか楽しさ、また一方で問題に直面したとき、いかに困難を乗り切ったか、職業生活と家庭生活のバランスのとり方はどうであったかお話いただきたいと思います。

○花井（幸）　簡単ではございますけれども、私が子供のころからの話をちょっとさせていただきます。私は、いまご紹介いただきましたように、昭和12年生まれですから、今年、年女です。そして、子供のころから大変に絵を描くことと、バレエを踊ることが大好きで、それも小学校３年のときに自分で気が付いた。自分で気が付いたといいますか、私は小学校の１年、２年の頃は、絵を描くことは大嫌いでしたが、たまたま小学校３年のときに図画の先生が担任でいらっしゃいまして、一生懸命クラスメイトをモデ

花　井　幸　子　氏

ルにして描いていましたら、私の後ろに立たれて、「あなた、絵が上手じゃない」と一言おっしゃったのです。私はそれまで図画の時間というのは大嫌いで、１年生、２年生は想像画しか描かなかったものですが、写生というのを初めてしましたら、とても面白くて一生懸命描いていました。そうしたら、先生がそうおっしゃったので、「私は絵が描けるんだ」と初めて気が付いたんですね。そして、明くる日から、いいえ、家に帰ってその日から、うちは５人兄弟で７人家族でしたので、片っ端から家族の肖像画だったり、鍋、釜に至るまで、いろんなものをスケッチして、毎日絵を描くことが楽しくてしょうがなかったんです。先ほど向井さんがおっしゃったように、絵を描くことが本当に好きになったのですね。

私は小学校３年のときに疎開をいたしまして、青梅という所に住んでいました。いまは青梅マラソンで大変有名ですが、昔は東京都西多摩郡と言われる所です。とてもバレエの先生なんかがいらっしゃるような町ではなかったのですが、たまたま東京からいらっしゃいまして、そこでバレエというものを初めて習うようになりました。子供のころからバレエを習うことと絵を描くことが大好きで、ほかの学科は何にも勉強するのが嫌いというぐらい偏る性格のようでした。そして、一生懸命絵を描いたり、踊りを踊ったりしていたわけですけれども、バレエは高校３年生まで習いました。

本当は絵を描くことよりバレリーナになることのほうが大きい夢だったのですが、絵を描いていますと自分をよく観察するようになります。やっぱり絵を描くということは何事も観察、ジロジロジロジロ物を見て描かなければ絵は描けませんので、そういった意味では自分の体、自分の顔、そういうものを全部分析するようになるわけです。そうすると、私はいくら自分が好きで踊っていても、このぺっちゃんこな鼻、そのころはそんな肥っていなかったのですが、ちょっと肥めな体、手足もあんまり長くないし、第一トウシューズで立ったときに、足の甲が出ないんですね。これは持って生まれた骨組みというのがすごく大きく影響するということは当時はわかりませんでしたけれども、私はトウシューズで立っても甲が出ない。いくら一生懸命踊っていても、これではちっともプリマになれない。花がないからバレエは諦めようというふうに、自分で自分を分析してやめることにしたのです。結局というか、泣く泣くやめたのですけれども。でも好きな絵を描くことが残っていたわけですから、これからバレエが駄目でも絵があるわという感じで、絵のほうを一生懸命やっていたわけです。

高校を卒業したら、当然就職をしなければいけない年代でしたので、たまたま父親が信用金庫に勤めておりまして、「お前さんの娘はもう高校卒業だから、うちの信用金庫に入れてあげるよ」という理事長のお話で、否も応もなく信用金庫に就職いたしま

した。元帳と出納とは最前列で、毎日前日の汚ないお金が来るわけです。それをきれいに伸ばして、ちゃんときれいに100枚ずつまとめて、きれいに束ねるという仕事。ですから、私のいまの仕事からはとても想像のつかない、全く関係がない仕事を1年半ほどそれは一生懸命いたしました。先程お話ししましたように私は絵に憧れて育ちました。当時の私たち若い者にとって中原淳一さんの『ひまわり』とか『それいゆ』というご本をご存じの方もいらっしゃると思いますが、それはバイブルみたいな本だったのです。私はいつもいつも先生の絵を模写して描いていました。

信用金庫に勤めていても、どうしても絵を忘れることができませんで、やっぱり私は「何だかよくわからないけれどファッションのお仕事がしたい」と両親に訴えました。そうしましたら、両親は「デザイナーとか、そういう絵を描く人間というのは、何十万人に一人きりしかプロにはなれないのだから、家のような家庭にそんな人間がいるわけがないから駄目だ」というふうに父親は大変反対しました。そういった意味では美術学校も行っておりませんし、普通の高校を出ただけで、ましてや青梅という所は大変田舎でしたから、いまほど交通の便もよくなかったし。それでも、どうしても私はやりたかった。そんな私の思いに陰に回りながら母親が「そんなにお前がやりたいのなら、私が応援するからやってごらんなさい」と勇気付けてくれたのです。そのときに私は、初めて両親というものは何てありがたいんだろうと。父親は絶対にいけないというブレーキをかけるし、母親は陰に回りながら援助してくれるという。何か2人とも裏切れない、子供心といいましょうか、20歳ぐらいだったのですが、そのときに本当に「ああ、両親ってありがたいな」としみじみ思ったわけです。

そのころにはもう中原淳一先生の絵から、とても素晴らしい絵を描く先生がいらっしゃるのですが、いまもご健在でいらっしゃる長沢節先生に憧れていました。そして、先生の門を叩いたのです。先ほど申し上げましたように、うちは5人兄弟でしかも、私は長女ですから、家庭的にはもう学校へ行けるほどの余裕もないし、「お前がやりたいなら1人でやりなさい」と言われましたので、それまで信用金庫で勤めてためたお給料を少しずつ削りながら学校へ通ったわけです。昼間の学校に通っていたのですが、昼間だと何となくのんびりしたムードだったので、じゃあ、私は夜学へ行こうと。夜の生徒のほうが必死に働いて、必死に学校で勉強しようというエネルギッシュな方が多くて、これはもう夜のほうが絶対いいということで、夜間に移ったのです。

そのようなことで、昼間働かなければならない。しかし、当時は本当に就職難の時代でした。神田橋女子職業安定所へ毎日通いまして、昼間働きながら夜学校へ行ける所はないかしらと。たまたまそこで紹介されたのが、富士電機製造株式会社という、重

電機工業関係の会社だったのですが、そこに就職が決まりました。そして、夜は長沢節の学校に通っていました。夜９時に学校が終わりますと、青梅まで帰るのに夜は２時間から２時間半かかります。学校は１日おきだったのですが、帰りますと夜中の11時、12時で、いつもいつも母が青梅の駅で待っていてくれましたけれども、本当に言うならば苦学だったと思います。ですけれども、当時は苦学をしているなんて自分では全く思っていませんでした。同じクラスのみんなと、学校の帰りにお茶を飲んだり、若いからいろいろ議論をしたりしていました。本当は私もその場にずっといたいのだけれども、帰らなければ明日また会社へ行けないからと、もう後ろ髪引かれる思いで帰りました。このようにして学校を卒業したんです。

私は絵の学校を出ただけで、洋裁学校を卒業しておりませんので、洋服に関するところには就職ができないわけです。例えばオートクチュールでピン打ちするためにサロンに就職したいと言ってもそれもできませんし、もちろん既製服会社も、まだ当時は大変小さい既製服会社ばっかりの時代でしたけれども、当然そこも就職できません。ですから、結局は自分で始めるしかなかったのです。その学校を卒業したと同時にアドセンターというデザイン会社に就職できました。これはグラフィックデザインの会社ですので、洋服を作っているアトリエではなく、いわゆるデザインする、広告をデザインする、イラストレーションを描く会社です。その頃、たまたま『週間平凡』という本が、いまで言うマガジンハウス、当時は平凡出版社といいましたけれども、出ていました。その本のファッションページ５頁から７頁をアドセンターが毎週請負うという仕事がありました。そこで私はいまで言うスタイリストの仕事とか、洋服をデザインして洋裁店に縫ってもらいながら、いまでは大変有名な立木義浩さんというカメラマンもそこでご一緒でしたけれども、立木さんたちが写真を撮って、それを入稿して本に出してという仕事を始めていました。そういう仕事でしたので割合、絵を描くことと同時に洋服を作ることも間接的には携わっていたわけです。

そして、独立ということになるのですが、その富士電機製造株式会社に就職したときに、隣の席に座っておりましたのが主人でした。ですから、富士電機に１年半就職していましたが、何か結婚相手を探しに行ったみたいだなという感じです。そして、学校卒業と同時に富士電機を辞めて、アドセンターに入ったわけです。そして、アドセンターで６年ほどいろいろな仕事を覚えました。そうこうしている間に子供が生まれるということで、アドセンターを辞めたわけなのですけれども、辞めるに当たりまして、私は自分で小さなアトリエを持ちたいと思いました。といいますのは、アドセンターは広告用の絵を描くという、洋服を作るというよりはグラフィックデザインの仕

事が主でしたので、自分でデザイナーとして独立するためにはアトリエを持ちたいと思いまして、出産を機会に小さなアトリエを持ちました。パターンをする人が1人と、縫える人が1人と、デザインして仮縫いをする人間が私ということで、3人で始めた小さなアトリエなのですけれども、そこからが私の出発なんです。本格的にデザイナーとしての出発だったんですけれども、それがちょうど子供の年と一緒で、まる33年前の話なのです。

それで、小さい会社のアトリエですけれども、少しずつ少しずつ縫う人が増えてきました。最初のお客様は、何かお客様の体を借りて自分で勉強したみたいな、お客様に対してはとても申し訳なかったなと思っています。でも、他のデザイナーの所で洋服を作って、「ちょっと手が上がらないのよ」とか、「ちょっと着にくくてね」とかとおっしゃるお客様が、「あなたが仮縫いすると着やすくて、まずやせて見える」と喜んでいただいたのです。本当に自己流の仮縫いですけれども、生きている人間が相手ですから、30分以上立たせたら、もうお客様は動き出しますから仮縫いはできません。そういう意味では30分が勝負で、本当に真剣に時の経つのも忘れるぐらい一生懸命仮縫いに取り組んで洋服を作っていたのです。そのような洋服がお客様に評判がよかったものですから、私もだんだん自信がついてきたのです。

そうやって過ごしているうちに、先ほどご紹介いただきましたように300何人に膨れてまいりました。けれども、本当に私はこれだけの大きい会社をつくりたいとか、こうなりたいとかという、大きな目標はなかったのですが、ただ好きな仕事をやっていきたいという思いだけで走ってきました。今考えてみますと結婚ということがまず一番最初にぽんと私に突きつけられた、試練のときだったのです。皆さんの前で、夫婦でこういう話をするのは初めてなので、すごく照れくさいんですよね。ですけれども言ってしまいますけど。

私は結婚する方がどんな相手であっても、まず私の仕事の芽を摘まないでほしいと。そういう人であるなら結婚したい、というふうに思っていました。若いですから、ああいう人もすてき、こういう人もすてき、こういう人も付き合ってみたいという思いはあっても、あっ、あの人だとちょっと駄目みたいねとか。最初に信用金庫にいた頃は、特に閉鎖的というか、古いといいますか、女がちょっと出しゃ張ると何とかかんとかいう男性がすごく多かったり、すぐ僻みそうな人が多かったように思います。もしかすると、私のほうが収入が多くなるかもしれないから、女房のほうが収入が多いと僻まれちゃ困るしとか、22歳でしたけれどいろいろなことを考えて、一瞬ですけどいろいろ考えて、そして結婚した相手です。

まず僻まない。それから、私のほうが収入が多くても平気。でも、最初に私が働いたお金だから、私の名前で、私は私、あなたはあなたで貯金通帳を別にしようと思ったら、すごく怒られました。旧姓廣瀬幸子ですので、廣瀬で仕事をしたいと言ったら、「結婚したんだから花井になったほうがいいよ」と言うんです。「だって、花井なんてまだ本の印刷にもなったこともないんだし嫌だ」と言ったんですけれど、たまたま会社の上司が「花井さんっていう人と結婚したんだから、花井がいいんじゃないんですか」と言われて、いまや離婚しても花井幸子は持っていようと思っておりますけれども、なかなかいい名前の人と結婚したなと思っております。そういう意味で、36年でしょうか。もう結婚してそのぐらいになっております。

一番困ったときは出産のときです。本当に託児所もなく、いろいろと四方八方手を尽くしましたけれども、子供を預かってくれる所がなくて、そんなことを言っていてもどんどんお腹が大きくなって、生まれてしまったのです。当時、私は途方に暮れていました。アトリエは借りてしまったし、子供を見てくれる人はいない、お手伝いさんを雇えるほどのお金もないし、どうしよう、どうしようと言っているときに、主人の母が長野県から上京して、お祝いに来てくれたのです。でも、私があまり困りあぐねているので、「それじゃあ、私が連れて帰る」と申し出てくれたのですが、何しろ東京と長野県の木曽福島まで離れている４時間の距離が本当に堪えられるかしら。私自身は悲しくて悲しくて毎日泣いていたのですが、姑が「ママがこんなに泣いて悲しがってるなら、私はこの子を夜中に連れ出して連れて帰ろう」と思ったぐらいなのです。そんなことをしながら１カ月ほどうちにいてくれましたけれども、息子を連れて長野県に帰って、４歳になるまで育てて頂きました。そして、私はアトリエが何とか回っていくように、その間努力していけるようになったのです。

何が一番辛いというのは、子離れするときが本当に辛かったです。そのこと以外は、仕事のうえでの困難というのは、私は困難と思ったことがありません。もうどんなことでも当然やるべきだと思っていました。それから、いままでに１回も仕事を辞めたいと思ったことはありません。この辺は男性の感覚と一緒なんじゃないかなと思います。いろいろな仕事をしていくうえで確かにハンディもあると思うし、女だからって馬鹿にされるとよく友人達も言いますけれども、私にとってはそういうことは感じたこともないし、本当にそういう体験が１回もありません。ですから、自分がどうしてもこれをやりたいんだという目標を持ちますと、結婚相手の選び方も変わりますし、結婚の決断を迫られたときに、やっぱり私はこういう仕事をしたいんだけど、させてくれるかしら、ということをまず打診するわけです。それで、いいよということだった

ので、結婚しました。何かお父さんみたいな人だなと思って結婚したんですけれども。それから、出産や子育てというのは本当に大変でした。先程お話しいたしましたように私のいままでの人生の中で子育てぐらい悲しい思いをしたことはないのです。

あとは職業生活と家庭生活、これのバランスですけれども、四角い部屋を丸く掃くという程度で、すべて端折りながら、それでも主人も一緒に協力してくれますので、そういった意味では大きな夫婦間のトラブルはありません。年中こぜり合いの喧嘩をしながらも、現在まで至っております。大体概略というと、そういう感じです。どうもありがとうございました。

○石井　どうもありがとうございました。問題に直面したときに、いかに困難を乗り切ったか、ご提案いただけますでしょうかと、私たちは勝手に思い込んで花井先生にお願いしましたけれども、一度も仕事で嫌だと、困難を困難だと思ったことがないと。このお言葉は、やはり好きな仕事を一心不乱でやり抜いていらっしゃる方、どなたもがそうおっしゃるというのが私はいつも不思議に思います。あのとき大変だった、このとき大変だったとおっしゃる方が非常に少ないですね。「困難といえばそうだったんでしょうけど、そのときはそんなふうに思いませんでした」とか、「いまになって、そう言われればそうだったのかもしれませんね」とおっしゃる方が大変多いです。

ただいまの花井幸子さんのお話を踏まえまして、今度は花井喜俊さんにお話をしていただきます。会社社長でいらっしゃいます。その前はサラリーマンのご経験がございまして、違いがあるのかどうか。あるいは幸子さんについてお思いになること。経営者でいらっしゃいますし、社長でいらっしゃいますので、その視点から働く女性に対して何を期待するか。それから、最後ですけれども、やはり職業生活と家庭のバランスを保つうえでお考えになっていらっしゃることが、もしおありになればお話いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

○花井（喜）　大勢の方にお越しいただきまして、どうもありがとうございます。私は向井さんのように奥さんが遠くにいるわけではなくて隣にいるので、ちょっとしゃべりにくくて、どうなりますか。アメリカにいればこの話が聞こえていないのでいいのでしょうけれども。

花　井　喜　俊　氏

サラリーマンと会社社長の違いということですが、ちょっと家内も言っていましたが以前私は、富士電機製造という会社におりまして、サービスセンターなんていう、皆さんの家庭電化製品のサービスをする仕事をしていたのです。富士電機のジューサーとか洗濯機は有名でし

た。ああいうものの修理をする出張所で主任クラスの仕事をしておりました。そこで家内も一緒に働いていて、現在があるわけです。当初、私どもが就職するころは、月給1万円も満たなかったですね。7,000円とか8,000円ぐらいの給料で、大変に薄給でした。もちろん物価も安かったのですが、それにしても大変安い給料でした。そのうち所得倍増なんていう話が聞かれるようになってきて、だんだん所得が上がってきたのです。

いまでもそんな気風はありますが、脱サラというのが当時からありまして、何かやりたいなと皆さん大概思っていたはずなのです。私もそういうことは思ってはいたのですが、あえて何か自分で企業を、あるいは仕事を起こすというようなつもりはなかったのですが、たまたま家内がこの仕事をしている間にだんだんだんだん忙しくなってきた。それじゃあ、手伝ってやるかということで会社を辞めた、というのが本当かもしれません。辞めた、手伝ってやろうと、この辺がいけなかったですね。「手伝ってやる」と言ったら叱られました。「手伝うんじゃなくて一緒に仕事をするんだ」ということで、「ああそう、そのとおりだ」と。八百屋でも魚屋でも、父ちゃん、母ちゃんで社長、専務でもってやっているわけです。その辺の近所の八百屋、魚屋さん、これもみんな株式会社でやっていますので、我々もそれと同じだと。父ちゃん、母ちゃんの会社でやればいいじゃないか、というようなことで始めたのが昭和39年で、私が会社を辞めたのは41年です。

だんだん仕事が忙しくなったものですから、まずアトリエをつくるような仕事から始めまして、仕事場をしっかりつくって、車の免許も取り、あるいは会社の経理のこともよくわかりませんでしたから、この私も女房に負けじと夜間の経理学校へ通いまして、勉強をいたしました。昼間は運転手をしたり、外注に出したり、夜になると経理をやり、あるいは従業員の給料を計算したりというようなことで、会社が始まっていったわけです。最初は本当に4畳半2つぐらいの所で、従業員も3人しかおりませんでしたので、経理も毎日なんかやらなくていいのです。1カ月に1回とか、ひどいときには1年分をバーッとまとめてやるとか、そういうことをやっておりましたが、だんだん大きくなってきまして、そのうち銀座にお店が出せるようになってきたのです。それまでは、それこそ無店舗販売ですよ。いまでこそ無店舗販売と言われているようですが、自分たちの足でやっていたわけですが、銀座にお店が出せるようになりました。

お店を出すようになりましたら、ブティックというような形で、デザイナーが直接洋服をデザインして作るというようなことで、当時、注目を受けたわけです。雑誌に

ももうだいぶ紹介されましたものですから、地方の小売店さんが訪ねてきてくださいまして、銀座の店頭で買っていっていただくと。「ああ、こういう商売があるんだ。卸しという商売があるんだ」というようなことで卸しを始めるようになり、しかもだんだん既製服が注目されるようになってきたのです。それまでは主に注文服でやっておりました。既製服が注目されるようになってきて、既製服の時代だというようなことで、既製服に力を入れてどんどん伸びていった。百貨店さんもそういうデザイナーというものが台頭してきたので、その辺を上手にピックアップして、店頭に並べることによって、１つまた商売になるのではなかろうかというようなことで、銀座の松坂屋さんにいちばん先に入れさせていただいて、他のデザイナーの皆さんと一緒にやり始めた、というのが当社の歴史の第一歩かと思っております。

結婚するときにこうした仕事を続けさせてくれるかということを聞いて、承諾するという契約をしたみたいなことを彼女は言っていますが、私はあまり覚えておりませんけれども、「まあ、やったらいいじゃないのよ」ということはたしか言ったと思うのです。それがこんなになるとは思ってもおりませんでしたので、軽い気持ちで言って、どうせその辺の近所の洋服屋ぐらいのものだろうと思っていたのが、時代がこうさせたのかなと思う向きもあります。

先ほどの向井さんのお話ですが、好きなことをやっている、これがやっぱり一番なんじゃないでしょうかね。その好きなことをやっているのは、私も向井さんと同じように、邪魔しないで、一緒に助けてやっていった、というのが本当のことだと思います。向井さんのおっしゃること、そのままずばり、私は先ほどお伺いしていまして、そのとおりだなと思った次第でございます。

そういうことですから、私は会社の社長になっているのですが、よく電話がかかってくると、「社長さん、お願いします」と、幸子のほうを社長と言ってくるのです。これは、そのとおりでいいと思うのです。やはり花井幸子の洋服を売っている花井幸子の会社ですから、花井幸子が社長というのが本当かもしれませんけれども、会社をつくるときにいろいろ相談しました。税理士さんが「いやー、税務署というのはいろいろ面倒くさいんですよ。デザイナーがいちいち税務署に行ったりでは、大変ですから、社長さんはあなたがやったらいいんじゃないですか。いろいろ、面倒なことはあなたがやって、奥さんのほうは一生懸命作ればいいんですよ」というようなサジェッションもありました。それで、私がいま社長をやって、主にどちらかというと守りのほうをやるというような形かと思います。

それで、もちろん売らなければなりません。売るというのは、営業担当者がいまし

て、また一方では花井幸子のキャラクターというものも大きな要素で、花井幸子も第一線の営業担当者であります。当社の場合には、そういった仕事をいわば三権分立のような形でやっているのが現状かなと。私はもともと電気屋にいたわけですから、デザインのことなんか全然わかりません。どういう色とどういう色が似合うとか、どうだこうだなんていうことは全然わからないわけで、いま今日ここで着ています洋服も、今朝「何着ていったらいい」ということで、ちゃんとサジェッションを受けてきています。大体のことはわかりますけれども、今日皆さん女性ばっかり大勢いるというので、少しぐらいおしゃれしたほうがいいと思いましたので、どういうネクタイがいいのかとか。これも当社の製品でございます。洋服もそうです。まだまだ百貨店でたくさん売っていますから、是非お帰りにたくさん買っていっていただきたいと思います。

このようにデザインには私は口を出しません。出したら、またとんでもない。もしかしたら売れ残りをたくさんつくってしまうことにもなるわけです。むしろ、洋服を上手につくるためにはどれぐらいのお金をどうしたらいいのかとか、そういうことを私のほうはやっていればいいわけでして、そのためのコンピューターの開発なんかも一生懸命やっております。ここに書いてありますけれども、それが「アイム・ハッピー」というプログラムの名前になっているのです。これはインテグレーティッド・マダム・ハナイズ・アパレル・プロダクト・プロセッシング・システム、バイＹＨＰ3000、その頭を取りますと「アイム・ハッピー」になるのです。これは、仕事をするときにアイム・ハッピーでなければいけないのです。アイム・ハッピーならユー・ハッピー、トゥギャザー・ハッピー、カスタマーもハッピー、オール・ハッピーだと。とにかくハッピーにならなきゃいけないんだよと。それがうちの会社の哲学だということで、これはなかなかいい名前だと自負しているのですが、そういったコンピューターのプログラムで仕事を進めている。私は、その辺のことを中心にやっておりまして、通産省からもお墨付きをいただいてやっている次第です。

そういう会社で、現在、従業員は300人ほどおります。300人のうち８割は女性です。女性の洋服を作っているわけですから、女性がここで作るのがいちばんいいと。デザイナーは男性のデザイナーもいます。女性のデザイナーもいます。立場が違って、男性の場合にはいかに女性を美しく見ようか、あるいは見せようかというように、外から見てデザインなさるかもしれません。うちはそうではなくて、自分自身ですから、自分が自分で作りたいもの、着たいものを作って、そして満足できれば、私が満足できればみんなも満足、私がハッピーならみんなもハッピーと、こういうことでやってい

るのではないかと思うのです。その辺はちょっと男性のデザイナーと違うかもしれませんが、実際、洋服を作る段になれば、女性のほうがその辺よく技術も心得ておりますし、物を運ぶにしても大した重さの物もありませんので、女性でも十分できますし、本当に真面目によくやってくださいますので、女性を大勢起用しております。特に販売関係は女性ばっかりです。

そういう具合に、入社式なんかでも、女性がまいりますときに言いますには、「とにかくうちの会社は女性ばっかりだよ。女性が偉くなってるよ。いちばん偉い人にも女の人はいるし、常務も女性でいるし、途中、部長も課長も女性は大勢いる。とにかくみんな頑張ってやってちょうだいよ。決して女性だからといって差別するわけではない」と。給料も本当に同じです。「そのような待遇にしているから頑張ってちょうだいよ」と、いつも言っております。そのほかにも、夢を売る商売ですから、「夢を持ってほしい。夢はいろいろあると思う。旅行に行くのも結構でしょう。結婚するのも結構でしょう。そういう夢を持って仕事をしてほしい。夢を売ってるんだ。夢を売っている商売をするんだから、皆さんこそが夢を持ってくれなきゃ、夢もつくれない、売れないよ」というようなことを女性の社員に言っています。今年も38名、女性ばっかりでした。去年は男性も4名ほど採りましたけれども、今年は38名女性ばっかりでしたけれども、毎年新入社員が入ると、そういうことを言っています。

そういうことで、女性の力というのを私どもは最大限に利用していると思いますし、多少中には男性の幹部もいまして、古いのもおりまして、女性の使い方というのを上手にしない向きもあったのですが、そうではないよと。とにかく一人ひとりが担当者だし、責任者なんだから出張にもどんどん行ってもらって、というような形でやっていこうじゃないかと男性の幹部にも理解してもらいまして、女性も積極的な仕事をしてもらっているのが当社だと思っております。

家庭ですが、家庭はこれは先ほど家内が言いましたように、四角い部屋を丸く掃くということそのままです。私が電気屋におりましたものですから、電気洗濯機だとか、掃除機だとかの扱いは上手ですから、洗濯なんていうのは私の係です。なかなか上手です。色物は別に分けて洗うとか、袋に入れて洗う物はこうしなくてはいけないとか、そういうことは私が心得ておりまして、洗濯係は私ですし、掃除機なんかも上手に扱います。

お料理も適当にやります。この間も竹の子がたくさん届きました。これは言ってもいいのでしょうけれども、細川元総理大臣の奥様より、あそこは熊本なのですが、すごい竹林をお持ちで、竹の子を段ボール1箱送って頂きました。その竹の子を一晩か

かって湯がいて、翌日、会社にいろんな料理にして持っていって、「社長が作ったんだ、うまいぞ」と言って、社員に配って食べさせました。結構そういう家事も、暇がある時というか、やらなければなりませんからやっていると。でも、実は3、4年前までは私の両親と一緒に住んでおりましたものですから、両親がほとんどやってくれておりましたので、非常によかったです。それが田舎のほうに引っ込んでしまいましたので、その後はそういう生活をしているということで、夫婦二人になってまだそんなに日は経っていないのです。これから年とともにその辺が辛くなってくるのかな、という気がしないでもありませんが。

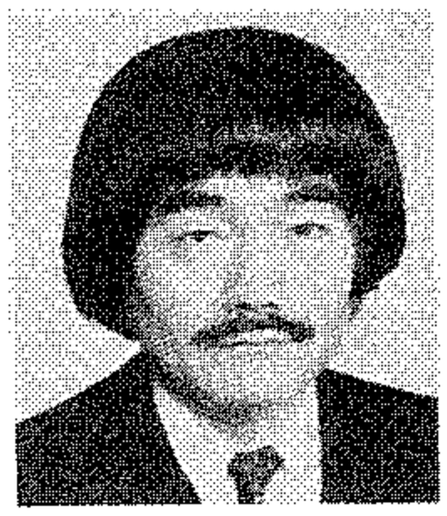
○花井（幸） ちなみにうちはお手伝いがいません。お掃除は週に2回して頂く人がいるのですけれども、家事一切は2人でやっておりますというか、早起きは彼のほうですので、大体先にやってくれています。

○花井（喜） 朝ご飯は大概私がつくっている、というところでしょうか。

○石井 どうもありがとうございました。お話がお互いのことになると噎せかえっていらっしゃいました。幸子先生のお話のときも、ご主人がずっと噎せかえっていらっしゃいました。もう本当にこの緊張感がいいですね。やっぱりご夫婦が仲がよろしいと何か緊張なさるというのは、本当に見ていて初々しくて。

○花井（幸） 冷汗が出ます。

○石井 あちらの控え室のほうにぱっと入りまして、花井幸子さんがファッションデザイナーでいらっしゃることを体中で表現していらっしゃって、本当におきれいでいらっしゃいますね。やっぱりなーと思いました。人間の第1印象というのは、その方が部屋にいらっしゃると後ろから空気が動くというんですかね。今日は大変心がときめいたのです。向井先生、長い間お待たせいたしました。向井さんは、先ほどのご講演にもございましたけれども、人間は好きなことをするに限っていると。やりたいことを主張し続ければ、周りの人間が動いてくれるものだよと力強いお言葉をいただきました。全然話は飛びますが、向井万起男さんはファッションなんかはお好きでございますか。



向　井　万起男　氏

○向井 いや、全然興味ないです。

○石井 千秋さんは。

○向井 全然ないです。女房は、おそらく日本中の女性の中で最もそういうものに興味のない女でしょう。ただ、私は結婚前は結構ファッションに気を使うタイプだったんですよ。これは女房の感化です。

○石井　それでは、生活の中でどうでしょう。先ほど花井喜俊さんは朝食をおつくりになるとおっしゃっていらっしゃいますけれども、お食事のほうは。

○向井　本当にあじけない人間で申し訳ないのですけれども、私は洋服に興味ない。ファッションに興味ない。食べ物にほとんど興味ないです。私は365日、毎日3食カレーライスでも気付かないかもしれません。それに、信用しない方がいるかもしれませんが、20数年間、体形が変わりません。私は本当に女房がいなくて寂しくて、365日酒を食らって寝ているんですけど、体形が変わらない、体を壊さない唯一の秘訣は毎日ヨガをやっているからです。

○石井　ご趣味はサウナとヨガなんですね。

○向井　私達は先ほどから言っているように異様な結婚形態で、女房が好き勝手なことをやって、亭主1人で日本に残って、ただひたすら待っているというパターンですが、女房は実に人選を間違えていないんですよ。私の女房はあっちゃこっちゃ飛び回る人生ですからね。そういう人間の結婚相手というのは、じっと動かないというのが向いているんですよ。双方ともに動いていると、どうにもならないわけですね。ですから、私は自分で自分の人生を定点人生と言っていますが、本当に慶応病院と自宅を、ただ往復しているだけなんですよ。ほとんど余計な行動をしない。ですから、私はポケットベルも持っていませんし、携帯電話も持つ必要がないし、というのは私をつかまえることは慶応病院でいちばん簡単だと言われていますから。私の研究室に電話をして、いなかったらトイレに行っているんだ。もうそれだけなんです。5分後には必ず私は戻っていますからね。それから、慶応病院にいなかったら、もう私は自宅しか考えられないんですよね。両方ともいなかったら、途中を移動しているだけなんです。私は自分で定点人生と。定点は2個しかないんですよね。ですから、女房のほうがあっちゃこっちゃ飛び回り、亭主のほうはじっとしている。このじっとしているというのも、なかなか好きなんです。

○石井　お家にいて何をしていらっしゃるのですか。

○向井　私は趣味がたった1つ、読書なんですよ。

○石井　これも動きませんね。

○向井　全然動かない。これはお金がかからない。どこにいてでもできる。ですから、私は家に帰ったら、酒を飲みながら本を読んでいるだけです。とにかく私は本さえ与えてくれていれば、何時間でも、何年間でも、1人で暮らせます。だから、女房は安心しているのです。「この人は本があるからね」と言っていますから。何ら心配いらないです。私は女房にいつも言っているのです。「お前がアメリカに行って、俺のそばにいて

くれないおかげで本当に読書がはかどる」と。女房もそれを聞いて、本当に喜んでいますよ。安心して。要するに、女房自身、亭主を１人残してアメリカに行くのは、何となく、妻として申し訳ないかなという気があったのかもしれませんが、私が「お前がいないおかげで読書がはかどって俺、助かっちゃうよ」と言うと、本当に喜んでいますよ。自分が１人アメリカに行くことが亭主の役に立っていると思えるわけですからね。だから、本当に私は自分で自分を分析して、向井千秋のような女の亭主に最も適した男だと思いますね。じっと待っているという。

○石井　そうですか。花井ご夫妻はお聞きになっていらして、何か私たちもそうだったわねというのはおありになりますか。

○花井（幸）　いいえ、全然形態が違います。

○向井　花井ご夫妻と私で決定的に違うのは、花井ご夫妻は２人で常に何かを築き上げるというか、本当に人生を２人で同じ速度で走っていますよね。うちは違いますから。先ほど言ったように、あいつは素足で走っているけど、私は自転車で楽ちん人生みたいな、やっぱり一緒に築き上げるというのと、ただ時々チャチャ入れているだけという私とは、やっぱりちょっと違うような気がしますね。

○花井（幸）　そうですね。うちの場合は、本当に24時間一緒ですし、仕事の種類は違いますけれども、ご飯を食べるのも当然一緒ですしね。ですから、夫婦というより、うちの場合何か戦友という感じでしょうね。

○石井　喜俊さんはいかがですか。

○花井（善）　私も、例えば田舎で一緒だった友人なんかが訪ねてくることがありますね。そうすると、何か私の職業は髪結いの亭主みたいなんじゃないかなと思って来る場合のほうがどうも多いですね。私は信州の木曽なのですが、同窓会なんかで話をするときも、やはり日ごろ女性に囲まれていますからね。言葉も少し柔らかくなったりしていますので、受ける感じがそうなんだと思うのです。そうすると、会社へ訪ねてきたりして、「俺はもっとおまえは髪結いの亭主みたいなことをやっているのかななんて思っちゃった」なんて実際に言われたこともありました。そういう人生もあったのかなということもありますが、先ほど向井さんも本当は家へ帰ったら三つ指ついて「お帰りなさいませ」というのを望んだこともありますというお話がありましたが、私にもあるとは思うのですが、それぞれこういう道を歩み始めてしまったわけでして、それはそれでまたいいんじゃないかなとも思います。何か山内一豊の妻というのがよく女性の鏡みたいに言われるわけですけれども、男性にもそういう人がいるんですね。

○花井（幸）　自分で言っちゃってる。

○花井（喜）　いや、向井さんもそのとおりでございますし。

○石井　いまお話をお聞きしまして、本当に聞いていてとってもこちらの心が和んでくるような、本当に仲が良い。この仲良しであるというのは、人をうらやんでみても仕方ないもので、その人が手に入れた、その人の人生の賜物だと思うのです。

私もＮＨＫのお仕事で「未来派宣言」という番組がありまして、数々の所を訪問して、取材をさせていただきました。その中で、50歳になる手前まで普通のご夫婦で、坊やが２人できてという。奥様が家にいて、職場結婚で、ご主人は会社の経理課長でいらしてという。ある日突然、奥様が勉強を始めたいと。しかも本当に仏教の仏門の勉強を始めたいと。ご主人は、「まあ、勉強はいいですから、どうぞおやりください」と言ったら、京都のお寺に通い出して、長い髪の毛を切るじゃないです、剃っちゃうわけです。それこそ手をついて、どうしても尼さんになりたくなったと。これは、自分が未来に向かって仏門に入るということで、中途半端じゃないんですね。寺を設けて庵主様になると。ですから、大変不便になったり、迷惑をかけるようだったら離婚をしてもいいですという、昔の方の考え方だと思うのですけれども。そうしたら、ご主人が定年退職前なのですが、「ちょっと待て。自分で全部たったたった行くな」ということで、「考えて振り返ってみれば、この30何年間、体が弱いのにラッシュアワーで会社に行き、何で元気なお前が家にいて、働かないで、働いていたのに結婚して辞めて、自分もちょっと考え直したい」と。経理課長でいらっしゃったわけですから、「寺はどうするんだ」と言ったら、「寺なんてそんなに最初からないんだから、押し入れを整理して、ここに仏壇を置いて家で始める」とおっしゃった。「そうか、じゃあ、僕が会社を辞めるというのはどうかね」と。会社のほうはびっくりして、定年退職金というものをもらうまで、あと１、２と数えるぐらいしかないのに、何でまた急にそんな気になったとワーワー言ったのですが、本人はすっと辞めてしまわれました。

そこへ取材へまいりましたら、お経をあげていらっしゃるんですね。ご主人に「何がいちばん大変でしたか」と言ったら、「もうお経が音痴で音痴で、これを聞くのがいちばん大変だった。あとは別に苦労はないです」、「じゃあ、さぞかしお料理が上手でお掃除が上手で」、いや、僕はサラリーマンでしたから、女房が全部やっておりました。ただ、本当に好きなことと、その人を見た全体の人間らしさということからいくと、僕が経理をやって、スケジュール管理をして、女房は昔から声が大きくて、恰幅がよくて、大きな声を出すおばさんなんて言われてたけれども、これが尼さんになって、すっきりして袈裟をかけたら、本当に立派な庵主様で、大きな声で、しかも絵が上手で、字を書いて絵を描いてすっと人に渡したりして、講演をして解いて回っているのです。こ

んな人生があるとは思わなかったとおっしゃっていました。

そうしたら、京都から近くのお寺で、85歳になる庵主様になる資格を持った方が、「もう先がないので、誰かこの寺を廃寺にならないように継いでくれないか」と思ったら、新聞で読んだ」と言って、電話をかけてきてくださった。お寺1つ、ご主人のものになったのです。それでNHKで取材に行ったのですけれども、もうご主人は張り切っちゃって大変。「あそこの所、もうちょっと屋根出さなきゃいけないと思うのよね」と言葉遣いがもうそうなってしまっていらっしゃるのです。「ここ水屋でしょう」なんて言って案内していただいたのですけれども、本当に生き生きしていらっしゃいました。

申し上げたいことは、先ほど中村道子さんがおっしゃっていて、私たちは女性として、この21世紀に向けて社会に何を期待しているのか。平等か、保護か、今後は何なのか。セクハラ問題もいろいろありますが、権利、義務プラス能力とこの3つを考えたときに、好きなこと、本当にやりたいこと、これからやりたいことでも勇気と決心を持ってやっても、主張し続けることも必要でしょうが、これと自分勝手どしたい放題とは違うのだと。21世紀に向かって成人していく若者たちは迷いも多いと思うのです。いちばん迷っているのは、果たして結婚が人生の幸せかどうか。平等と保護ということからいうと、女性がもっともっと保護されるのだったら結婚も必要ないんじゃないかと思っている人間もいるでしょうし、私はこれ好き、あれは嫌いと言いながら選んでいくことがやりたいことを主張することなのか、と思っている場合もあるでしょう。

権利、義務、能力というのは、私は大学でアメリカに行かせていただきましたが、それまで普通の日本の公立の小・中・高へ行きまして、まだ教えてもらった教育の体制が背中にべったり張り付いているのですが、権利、義務、能力なんていうのを高校3年まで教えてもらった記憶がないのです。先生たちは科目の教科書の知識は教えてくれましたけれども、こういうものでディスカッションした覚えもありませんし、大学に行って初めてそんな教科書をいただいて、憲法についても、民主主義についても、人権というものについては、特に高校までは教えてもらった記憶がありません。ですから、たぶん若い人たちは迷いも多いと思います。周りばっかりがグローバルな視点でものを考えろと、そんなことばっかり言っていても、日本はまだまだ本当にそういう個人の視点とグローバル性というものを、点と点を線で結べるような、力強い若者がいるかどうか、大変不安なのです。

折角ですので、皆様にこれから提言として、やはり若者に向かって、これから人生

を新しく第一歩を踏み出そうとする人間たち。若者は第1歩かもしれませんが、我々が第35歩でも、やっぱりそれは初めの第一歩ですので、この権利、義務、能力と、したい放題、自分の好きなことをするに限るという信念を持つこととの違いのようなものを残り時間でお話いただければと思います。大変難しいテーマで恐縮でございますが、皆様も関心のあることと思いますので、いかがでしょうか。花井幸子さんからお願いします。

○花井（幸） 大変に難しい。いろいろな方のお話も聞きたいと思うのですけれども、私はたまたま昨年1年間リフレッシュ休暇をもらいまして、30何年ぶり、初めてニューヨークで1人で暮らしてみたのです。そして、向こうのお友達といっても日本人の人が多いわけですけれども、そういう20年も30年も住んでいる人たちの話を聞きますと、やはりアメリカ人はというか、アメリカ人の中でも限られているとは思うのですけれども、他人と意見が違うということにすごく自分の価値を持っていると。ですから、あの人がああ言った、この人はこう言った、でも私はこうであるという、その主張する仕方が、子供のときの教育から学校で教わると。みんなと同じということはいちばん馬鹿であるというふうに言われるぐらい違うんだよと。

でも、日本の場合はやはり島国ということもあるし、農耕民族という長い伝統的な血もあるし、何人か一緒で安心という安心感を大切にしていると思うのです。やはり農耕民族というのは、うちの屋根を葺いたら、終わったら隣の屋根を葺こうとか、何か隣近所がみんな協力し合いながら生きてきたという時代がすごく長いわけです。ですから、隣は何をしているのかなということがすごく気になるわけです。自分たちよりもちょっと違うことをして、自分たちよりもちょっと恵まれていたりしたりすると、やっぱりお節介だけど足を引っ張りたくなるとか、何か平等でないと気が済まない部分というのが、これはいいとか悪いとかではなくて、血の中にあるのではないかなと思うのです。ですから、そういった小さな島国の中での平等生活、みんなで渡れば怖くないみたいなところがすごく多いと。

だけど、アメリカというか、狩猟民族は家族だけ連れてどんどん獲物を探して、それで食べて、それがなくなればまた移動してというふうに、家族単位で動いていた歴史が非常に長い民族であるから、他人と違うというのは当たり前であるというふうに思っている。だけど、私はそれがいいとか悪いとかではないと思います。やはり風土に根付いた人間の考え方、主義主張というのは、やはりそれはもう血なのです。ただ、よそと違うということを知っているということは、すごく大事なことではないかなと。そう思うので、やはり政治の外交の仕方であるとか、または日常的な買い物のやり方

であるとか、小さいことから大きいことまでのその差です。やっぱり相手をよく知るということは、すごく大事なことだと思うのです。

円安になってきて、いろいろと通商の関係でまたいじめられそうでしょう。だから、そういうときにやはりその違いというのをしっかりと見極めながら主張するということは、すごく大事なことだと思います。やっぱり主張しなさすぎると思うのです。私はもっと怒っていいと思うのです。いろいろなことに関して、怒ったり主張したりするということ。やっぱり言わなければわからない。黙っていると、わからないなと思います。主人だって、毎日一緒にいても何も言わなければわからないから、そういう意味で言い合うということはすごく大事なことだと思います。その代わり、あとを引かないことが大事です。やっぱり日本というのは、言ってしまうと喧嘩になってしまったり、根に持たれたりする。でも、アメリカ人というのは違うのです。何か前の日にガンガン言い合っても、明くる日はハーイという感じで、そういう違いというのをわかったほうがいいなと。生活してみたら、そんなことなんだけれども気が付いたというか、実感としてわからせてもらえてよかったなと思いました。

○石井　そうですか。喜俊さんはいかがでいらっしゃいますか。

○花井（喜）　私はこの仕事をしていますと、よく学生のファッションコンテストの場に行くことがあるのです。そこへ行きますと、特に若い方々は個性、個性。今日の会議のテーマにもなっていますが、個性、個性ということで、本当に一生懸命作ってくるのです。その代わり、本当に個性的です。着られないようなものがいっぱい出てきます。どうも我々の育った時代、ちょうど戦争が終わりまして、民主主義、民主主義と、口を開けばすぐ民主主義ということがあって、１億総民主主義で、民主主義がわからないままに民主主義、民主主義と答えた時代があったのですが、いま何かそんなようなときなのかなと。いろいろ世界中を皆さんが歩いてきて、やっぱり違うんだな、個性なんだなというようなことを気付いて、個性って何だろう、人と違ったことをすればいいのかなというようなことで、何か違ったことさえすれば個性と思っている向きが、どうも若い方に多いのではなかろうかなと。

ですから、いま言ったような、何か民族間でもう少し移動があったりすると平均化されて、本当の意味の個性というものがこれから生まれてくるのかもしれないと思ってもいるわけです。とにかく人事募集をしても、人と違えばいいんだと、それを個性だと言って来ます。その辺を、やはり早く我々日本民族が勉強しなくてはいけないのかななんて思ったりもいたします。

○石井　違いを知って初めて自分を知るといいますか、違いを知って相手の意見を初めて納

得することもできると。しかし、私はあの人はきっとこういうことを言ったら向こうはこう言うだろうなと。それを言うだろうなとわかるというのは、相手を理解していないと、ちっともああ言うだろうなというのが想像つかないわけですが、もっと意見を言えば言うほど、相手をよく知ることになるのではないかと私も思います。向井万起男さんは、お２人のお話をお聞きになっていらっしゃって、今回のテーマは「婦人週間」なのですけれども、社会で男女ともが生き生きと暮らすには、今後はどういう課題があるとお思いになっていらっしゃいますか。

○向井　私は薔薇色の将来が待っているんじゃないかと思っているのですけれども。それは、生意気なことを言うようですけれども、世の中というのは、やっぱり中心は若者なんですよね。私は今年で50で、もう何か初老の域に達してきましたけれども、やっぱり世の中を変えるのは、いつの時代でも50の男ではなくて、絶対に若い人だと思うのです。若い人というのは、少なくとも私の見る限りでは、かなり変わってきていますよね。このパワーというのは、やっぱり私たちから見ても、接している学生とか若い人たちを見ていても、もういま完全に情報が世界各国を飛び回っているので、本当にいままでの日本人の常識では考えられないような価値観が生まれてくる可能性を何か私は感じるのです。放っておいたって絶対世の中うまく行くよと思うし、それからアメリカのライフスタイルとかそういうものが、全然羨望の的とかそんなのではなくて、ごく身近な例として、もう若者の生活の中に入ってきています。私は、医学部の教員でもあるわけですけれども、一教員として見てもあまりやかましいことを言わないで、若い人たちに任せておけば自動的に世の中は動いていくんだよ、というのをヒシヒシと感じているのです。

ちょっとわかりやすい例を言うと、私はビートルズ世代なのです。だからこんな髪の毛をしているわけではないですよ。髪型は何の関係もないのですけれども、私は、ビートルズが日本に来たときに武道館に見に行った口なんですよ。ビートルズが日本に来たのは私が19歳のときです。私は熱狂的ビートルズ世代なのです。あの当時、お年を召したいまの私のような年齢、50歳ぐらいの人たちは何と言ったかというと、「くだらない」、「不潔」、「あんな長髪の、あんな４人組のどこがいいんだ」と言って馬鹿にしまくっていましたよ。「本当に近ごろの若いやつはしょうがない」とか言っていましたが、いまはどうですか。ビートルズというのはクラッシックの部類に入ってきていますよ。もう完全にスタンダードナンバーですよね。ビートルズの歌というものをこの世の中から消したら、あじけないまでになっちゃうぐらいの文化になっているわけですよ。

それから、私は医師としてちょっと付け加えておきますが、皆さん、医療とは何の関係もない方でもＣＴスキャンというのはご存じではないですか。このＣＴというのはイギリスで開発されたものなのです。イギリスでいろんな人たちが、何とか素晴らしい画像診断用の装置をつくろうと頑張っていたのですが、もう理論は出来上がった。完全に理論はもう突き詰められたけど、これを応用編にもっていって画像撮影装置をつくるお金がなかったのです。でも結局、イギリスがついにＣＴをつくり上げて、世界中の医療を大きく変えてしまったのです。私たち医療の現場にいる人間にとって、地球の歴史上、最も医療を変えたのはＣＴなのです。ＣＴをもってして新しい医療が始まった、と言われるぐらい素晴らしいものです。

このイギリスの開発チームはお金がなかった。でもできたというのはどうしてかというと、ビートルズのレコードで稼いだレコード会社がお金を出したのです。皆さん、よく覚えてくださいね。あの当時、お年を召した方たちが「汚ない」、「うるさい」、「何だあれは」と言ったあのビートルズのレコードを世界中の若者が買ったからＣＴができたのです。これは冗談ではなく本当なのです。本当に若者が世の中を大きく変えるというのが私の持論です。近ごろの若い者は本当にしょうがないというのがソクラテスの言葉に残っていますよね。そのぐらい昔から言われていますけれども、結局のところ、私も含めて年寄りは駄目です。やっぱり若者が世の中を変えていくようにしなければいけないし、事実変わっていくのだと思います。私は若者に対して、「ルーズソックス履いてるの、何だあれは」とか、うるさい音楽がどうした、こうしたなんて言う人には、必ずＣＴとビートルズの話をすることにしているのです。「あなたよく考えたほうがいいよ。本当にわからないんだから、世の中は。将来どうなっているかわかりませんよ」ということを言うのです。本当に私は、いまの若者に世間一般の人よりは全然失望していません。こいつらが世の中を変えていくだろうと。

ただ、私はアメリカ大好き人間なので、ちょっと参考までに言っておきますけれども、アメリカはもっとこの文化が定着しています。若者がすべてだという文化が。私はこの若者というものを大事にする、若者が世の中を変えていくという、これをアメリカの真似をしろとは言わないけれども、もう少し日本のお年を召した方は考え直したほうがいいのではないかと思います。

１つ例を挙げておきますが、私はよく言うのですけれども、皆さん宇宙に興味がなくても、きっと「アポロ13」という映画を見たりとか、テレビのドキュメントなんかを見たりしている人が多いと思います。本当にあのアポロ13号の乗組員がどうなるかわからなくなってしまったときに、地上管制官たちがチームをつくって一生懸命頑

張った。本当に３人の宇宙飛行士を助けるために、ミッションコントロールセンターという管制ルームで頑張り続けたというのが映画にもなったわけです。そのときの、あのアポロ13号の飛行のすべての運用に全責任を負ったフライトディレクターというチーフは36歳なんですよ。これは映画とかテレビでもほとんど触れられていませんが、日本だと36歳の男がアポロの運用のすべてを任されていたなんて信じられませんでしょう。考えられない。それから、あのときにその36歳の男の下でエンジン部門の専門家、機体部門の専門家として働いていたのは、ほとんどが20代ですよ。20代の男、最高責任者が36歳、こういう男たちがアポロプロジェクトを動かしていた。

これは、日本人はちょっと感じ取ったほうがいいと思いますね。それから、若者が何かをしたいと言ったときに、アメリカというのは日本ほど邪魔をしないし、耳を傾けてくれます。これは、すごく大きな文化の差だと思います。

それから、私は医師として１年間、女房のスペースシャトル飛行に合わせて留学していましたけれども、本当に留学してよかったと思ったことが１つあるのです。それは病院中が若い医者を中心に動いているのです。これは、日本の慶応病院をはじめとして、すべての大学病院で考えられないことです。本当に驚いたのは、私は病理部門にいたわけですが、そこに病理の医者が30人いて、60歳代、50歳代、40歳代とかいろいろいるわけです。そういうお年を召したスタッフが毎日何を中心に動いているかというと、医学部を卒業したばっかりの、20代の若い医者を鍛えることが中心になって職場が動いているのです。本当に、その研究室で、病理学という部門で最も中心をなしているのは、これから世に出ていく若い人たちなのです。その若い男と女のために、60歳を過ぎた教授たちが毎朝７時半から来て一生懸命教えるのです。その姿というのを見ただけでも、留学の価値はあったなと思います。要するに、すべてが、毎日が世の中に出ようとしている若者を中心に動いているというのは新鮮な驚きだったのです。ですから、私はこれから日本でも、本当にもっともっと若者を信じてほしいなと思うし、皆さんの周りで「近ごろの若いやつはしょうがない。何だ」と言ったときに、ちょっとでいいですから、ビートルズとＣＴの関係を思い出してください。

○石井　どうもありがとうございました。ビートルズとＣＴの関係、それは動機付けというのはどこにあったんでしょうね。ビートルズがこれだけのお金を自分たちが持って死ねるわけでもないし、今後、未来永劫、ビートルズの名前は歴史上に燦然と輝くものになるのだから、どうぞお使いくださいと言ったのでしょうか。

○向井　それは違います。ＥＭＩというレコード会社をご存じですか。ＣＴというのは昔はエミ・スキャンと言われていたのです。エミがお金を出したからです。ビートルズの

レコードを発売して大儲けしたエミが、社会に還元しようとしてお金を出したのです。ビートルズが外貨を稼がなかったら、世の中でＣＴは出なかった。そうしたら、本当に世界中で何百万人の人が病気で死んだんですよ。

○石井　そういうお話を聞いて、日本はどうしてそういうことが起こらないのか、という分析はいかがですか。日本にも安室とか小室とかいろいろいるんですけれども。

○向井　いますよね。だけど、何というのか、少なくとも日本では、イギリスやアメリカよりも若者の文化というものに対して冷淡なのではないですか。私は何か、自分は常日ごろ大学で若い人と接しているので、結構許容範囲が広いと思いますけれども、見ていると、どうも若者に関して、先ほどから言っているように、日本には若者が中心でいいじゃないかという文化はないと思いますね。

○石井　花井ご夫妻、どうでしょうか。

○花井（喜）　私は先ほど何か若者の批判めいたことを申し上げたのですが、本当にそうですね。我々もそういう世代を経てきたわけですので、向井先生のおっしゃるとおり放っておいてもいいのかもしれませんね。だんだん自浄作用というか、そういうようにして出来上がっていくのかしら。それこそビートルズは勲章ももらいましたね。そういうようにして、認めるべきは認めるということが非常に大切だと思いますね。絵が上手だと認められてこうなったという人もいるわけですから、そういう本当に何か認めるところをぽんと認めてあげる、ということは大変いいことだと思います。

○花井（幸）　若者のエネルギーというのは、本当に我々の想像を絶するほど強いパワーがあるわけですから、ぽんと仕事を任せると、必死に死ぬ思いでというぐらい、任されると一生懸命になりますね。これは本当に事実だと思います。ですから、確かに我々はもう年も経て経験もあるから、判断力はあるかもしれないけれども、エネルギーはもう絶対に若者には勝てないわけで、そういった中で若者のパワーというのは、安保のときもそうでしたけれども、どの国でも学生運動というのはすごかったですよね。純粋ゆえにすごいパワーが動くということはいろいろな国で起きていることも事実ですし。向井先生はそうではないとおっしゃっていらっしゃるけれども、そういった意味では何かいまの若者のほうが反対に、何か満足してしまっている部分が多くて、頼りないなと思う部分も感じるのですけれども、やはり向井先生が接していらっしゃる若者はきっと優秀なのかもしれないですね。

○石井　どうもありがとうございました。あっという間にお時間になってしまいましたが、私も今日は多くを学ばせていただきました。自分なりに観察をいたしまして、やはり文化、例えば音楽でありますとか、自分が生きている時代にどんなものが流行り、どん

な動きがあったかというものは、文学とか、音楽とか、例えば経営者でも、アメリカでビル・ゲイツというような人が出てくれば、日本ではそれは誰なのかとか、そういうバブルの時代に星の数ほど出てきた経営者たちの、いったい誰が駄目になり、誰が残るのかというのも、わりと目に見えるところがあるのですが、どうも政治だけは全くわかりません。停滞して若者のパワーが欠けているのは、政治の分野に関しては、仕事柄新聞を広げても、そこだけは何か希望が持てないと申しますか。

一時、「テレビタックル」という番組を長いことやっておりまして、田嶋陽子先生という方が法政大学の教授でいらっしゃいます。舛添要一さんとしょっちゅう喧嘩をしていらした方です。何を言われても平気な方なのですけれども、あの方が1つだけたじろんだことがありまして、国会を50%、50%、男女で分けたらどうなるかと。本当に平等ならそうするべきだと。そうしますと、男性の50%のほうはものすごい競争率になり、もう1つの50%の女性は議席が埋まらないというほどやりたい人が少ないのではないかと。それだけ女性は社会の意識に欠けているというふうに指摘されたときに、ちょうど50%パンパンと分けたときに、女性が果たしてそこを全部埋めるだけの意欲とやる気のある方がいるかどうかというところには、まだ自信がないと。

ですから、個人個人は大変元気で個性もあるだろうけれども、国ということに関して意見を言ったり、それに真っ向からエネルギーを注いだりしたいと思う分野が、特に男女を問わず、政治ではないような感じがする、とおっしゃっていらっしゃいました。私も、今後は具体性が必要になってくると思うのです。我々の時代は大変満たされておりまして、生まれたときから電子レンジはあるは、テレビはあるは、コンビニエンスストアはあるはでは、生活というものと生きがいというものが加味しません。テレビの仕事をしておりながら、こんなことを申し上げるのは僭越なのですが、テレビがなかった時代には、帰ってきたときに父親、母親というものがはっきりしていたのではないかと思うのです。テレビというものがありますと、何となくゴロゴロしていても時間が過ぎていってしまうと。それも1つの放送文化だというのであれば、これから先は具体的にどの分野に若い力なり、日本の力なりを世界に証明していくかというのが課題になってくると思います。私は自分の信じるところで、これから女性のパワーや教養や学問が低迷していくと。どちらかの国では、急に女性が一切外に出てはいけないと。21世紀に向けてそんな国があるのだろうかという、内戦の状態でそういうふうになってしまった国もありますけれども、日本においては女性がこれからまた昔のように再び封建制度に悩まされる、というような時代は来ないと思います。

我々もあえて若いとは言えないのですけれども、向井先生のおっしゃった、若者の

パワーを引き出す役割としてはどうしたらいいのか、というのを考えていきたいと思います。特にそういう意味であれば、女性というのは大変広範囲で力が及ぶのではないかと。家庭の中にいても、母親であっても、１人の個人の女性であっても、私は女性はやさしさと強さが内在しているものだと信じておりますので、皆様がそれぞれ21世紀に向けて自分らしい生き方ができる社会をつくろうと思っていただけることを期待いたしまして、終了させていただきます。どうもありがとうございました。

講　師　紹　介

向　井　万起男（慶應義塾大学助教授）

1947年東京生まれ。72年慶應義塾大学医学部卒業。86年宇宙飛行士の内藤（現：向井）千秋さんと結婚。現在、慶應義塾大学医学部助教授（病理学専攻）。医学博士。

著書「君について行こう―女房は宇宙をめざした」（95年）が人気を呼んだ。

石　井　苗　子（女優・キャスター）

同時通訳者を経て、88年から「ＣＢＳドキュメント」キャスターを務め、現在は「ＣＮＮ週刊地球テレビ」キャスター。91年伊丹十三監督「あげまん」で女優としてデビュー、パルコ劇場「ジェフリー」に出演し、テレビドラマでも活躍中。近著に「大人の女になりなさい」（97年）がある。

花　井　幸　子（ファッションデザイナー）

1937年横浜市生まれ。長沢節主宰セツ・モードセミナーでファッションイラストレーション修了。64年ファッションデザイナーとして独立。68年銀座にオートクチュールのブティック「マダム 花井」を開設。73年度日本ファッションエディターズクラブ賞受賞。

生活のすべてがデザインの場として、多数のライセンス商品を展開しており、多方面で活躍中。

花　井　喜　俊（㈱花井 代表取締役）

1935年長野県生まれ。13年勤務した富士電機製造株式会社を脱サラ。経営面から幸子夫人をサポートするため、67年㈲アトリエ花井を設立。二人三脚で30数年、経営手腕を発揮し、社員300名、全国に50店舗を有する株式会社花井を育てあげた。また、コンピューターを得意とし、独自に創り上げたプログラム名は「アイム・ハッピー」。

Ⅵ　閉会あいさつ

労働省女性局長　太　田　芳　枝

今日は長時間ご苦労さまでした。本当にありがとうございます。こんなにたくさん集まっていただいて、私は感激をしています。また今日の講師の方々はそれぞれの貴重なご体験に基づいた迫力ある話であったと思っています。21世紀が、男性にとっても女性にとっても生き生きと暮らしやすい世紀になるように、そしてまた日本になるように、私たち一人ひとりが努力していかなくてはいけないと思うわけですが、特に女性の地位向上をやっている我々といたしましては、日本の男性方にもう少し今日のパネラーの男性のように意識を変えていただいて、女も男もないんだ、一緒にやろうよというような考え方の男性がより増えてくだされば、日本は本当に世界の中でのリーダー国として立派にやっていけるのではないかと思うわけです。そのためには、女性たちが努力をしなければいけない。今日のご発言にもございましたように、主張をすること、また身近な人たちを変えていくこと、努力をしよう。小さな努力の積み重ねが、きっと大きな成果になっていくと、私はこれは信念として持っております。私も小さな努力は重ねております。いちばん身近なものも、向井様ほど変わってはおりませんけれども、私もそれなりには努力をさせていただいているかなというふうに思っているわけです。それはともかくも、是非、皆様方と力を合わせて21世紀がまた私たちにとって住みやすい日本となるように、努力を続けさせていっていただきたいと思いますので、是非、皆様方も本日のこの半日のご成果をそれぞれのお立場にお持ち帰りになって、努力を一緒に積み重ねていってくださることを心からお願いをいたしまして、閉会の挨拶をさせていただきます。本当に今日はありがとうございました。